
とある不思議の学園生活

男は背中で語る

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある不思議の学園生活

【Nコード】

N1063K

【作者名】

男は背中で語る

【あらすじ】

『不思議学園』は科学と魔術の両立した進学校。不思議学園の生徒の一人上条当麻はひょんな事でインデックスと名乗る少女に出会う。

そして上条当麻はインデックスと関わった事で様々な事件に巻き込まれていく。

これは私のもしも魔術側と科学側が完全に交わったらどうなるかという考えで書きました。

普段絡まない魔術側の人間と科学側の人間を絡ませたりします。

不幸な少年（前書き）

かなり原作と同じようにやっ
ていくつもりなのでよろしく
お願いします

不幸な少年

「不幸だああああああ！」

自分の叫び声がたとえどこの誰に迷惑を掛けようと、上条当麻は決してその逃げ足を止めはしない。

深夜の路地裏を息を荒らしながら、チラリと背後を振り返る。

いつもの様に、八人

何度見ても八人。もうかれこれ三キロ近く走りっぱなし。無論、上条当麻の様な一高校生がこの人数を相手にするには『無理』だ。やっつけようものなら、たちまち返り討ちに逢ってしまうだろう。

四月六日

明日から入学式か、とため息をもらしつつ最後の春休みを堪能し、夜になるまで遊び回り、腹減ったー、とお腹を満たすためにファミレスに入り、明らかに風体の悪い不良に絡まれる中学生くらいの女の子を見て、助けてやっかー、と常軌を逸した行動に出てしまったのだ。

まさかトイレからぞろぞろ仲間が出てくるなんて思わなかった。

集団でトイレに入るのは女の子だけだと思ってました、はい。

「……結局頼んでいたキャビアとトリュフとフカヒレの三代珍味高級丼がくる前に飛び出してきちゃったし、まだ食べてもいないのに食い逃げ扱いされるし。何なんですかこの不幸はー!？」

せっかく半額だったのに。いつもは手が出ないに高級品なのに。

頭をかきむしりながら上条は路地裏から表通りに飛び出す。

月明かりの降りる『学園都市』は東京都の三分の一を大きさを持つが、どこもかしこもカップルだらけ。何でこいつらはこんなに幸せオーラを放っているんですかーと独り身の上条は心の中で絶叫する。あちこちに立つ風力発電のプロペラが月明かりと夜景の光に照らされキラキラと光っている。上条はカップル達を引き裂くように夜の

町を突っ走る。

チラッと、自分の右手を見る。この右手に宿る力は不良も倒せないし、女の子にモテたりもしない。

「不幸だーっ！」

上条は不良の『集団』を完全に振り切らず、つかず離れずの状態を保ちながら走り続ける。完全に振り切るとケータイを使って増援を呼ばれるかもしれないバイクを持ってくるかもしれない。あくまで『スタミナ切れ』でぶっ倒れていただくには、適度に上条当麻という『エサ』をちらつかせ相手を走らせて疲れさせるしかない。

あくまで上条の目的は『人助け』。

相手を振り切り諦めさせれば『勝ち』なのだ。

元々、上条は長距離走に自信がある。対して相手は酒や煙草で体を壊し、靴も機能性ゼロのブーツ。しかも、ペース無視の全力疾走を続けていては長距離などは無理に等しい。

表通りと路地裏を交互に走り、無様に逃げ回る姿をさらしながら、一人、また一人と両ヒザに手をつく不良達の姿を確認していく。完璧、我ながらなんて作戦だと思いつつ、

「ちくしょう、何だって俺がこんな事に青春をかけなきゃなんねーんだ！」

悔しい。どこを見ても幸せいっぱい笑顔いっぱいのカップル達と上条当麻とでは、天と地、山と谷底ほどの違いがある。何だかひどく惨めだ。日付が変われば夢も希望もない学園生活が始まるのに、春休み最後の日くらい夢のような時間を過ごしたかったのに。

さらに二キロほど走ると、都市部を離れ大きな川のある大きな鉄橋に出る。車はない。周りには人っ子一人いない。

上条は後ろを振り返ってみる。

と、上条は足を止めた。さっきまで後を追っている人間が一人もいなくなっていた。「やっと……撒いたか」

「アンタ。不良を守って善人気取り。正直言って今時流行んないわ

よ」

上条は振り返る。鉄橋には灯りが無かったため気付かなかったのだ。上条の視線の先には女の子が一人立っている。ベージュ色のブレザーに紺系チェック柄のプリーツスカートという格好の、中学生くらいの女の子だ。

ファミレスで絡まれていた女の子だ。

「……て、事は。もしかしてあの不良共が追ってこなくなったのも」
「うん。めんどいから私が焼いた」

バチン、と青白い火花が響く。彼女の髪が揺れる度バチバチと火花を散らす。

今日は四月六日。

夜になるまで遊び回り、腹減ったー、とお腹を満たすためにファミレスに入り、明らかに風体の悪い不良に絡まれる中学生くらいの女の子を見て、助けちゃっかー、と常軌を逸した行動に出てしまったのだ。

けれど、上条が助けようと思ったのは彼女に不本意近づいた不良達の方だった。

かれこれ一ヶ月顔を合わせているが、お互いに名前すらよく覚えていない。

人助けのつもりで今日みたいに不良に絡まれている彼女を助けようとしたのだが最初だったと思う。その後彼女の能力を打ち消した事により、度々あっちからケンカをふっかけるようになったのだ。

「はあ。せっかくの上条さんのパーフェクトな作戦を全部無駄にしやがってからにこのビリビリ少女は」

上条は深いため息をつく、今にも限界に近い足をなんとか踏ん張らせた。

「うっさい！別にいいでしょーが！それに私には御坂美琴って名前があんのよ！」

「お前こそ。わかってんのか？俺は同じ学校に通ってる年上の人

だ。いわば先輩だ。先輩に敬意を払わない後輩をどうして名前で呼べるんだよ」

そう、このビリビリ少女御坂美琴は上条と同じ学校に通っているのだ。

しかも、『不思議学園』に七人しかいない超能力（レベル5）の一人なのだ。上条もその存在は知っていたが自分には関係ないだろうと名前すらよく知らなかったのだ。

「ったく。超能力（レベル5）であるこの私の名前すら知らないだなんて無知にも程があるわね」

これには上条はただ黙っているしかなかった。実際その通りだし、弁明をしても無意味だと思ったからだ。

「じゃっ。そういうことで。またな」

上条は全速力でその場を去るため、美琴に背を向け走り出す。

「うん。じゃあね。………って、ふざけんなぁー！！」

美琴のこめかみから電撃が飛ぶ。上条はその時とっさに右手を突き出す。電撃はそのまま上条を吹き飛ばした、ように見えた。

だが、上条の右手が数億ボルトの美琴の電撃を吹き飛ばしたのだ。

「あぶねーだろ！ 今のは上条さんの冗談ですませられませんかよ！」

「いいじゃない！ どうせアンタには効かないんだから！」

そう、上条当麻には超能力は効かない。

正確には超能力、魔術を含む『異能の力』が上条には効かないのだ。幻想殺し（イマジンブレイカー）

上条の唯一持つ異能を打ち消す能力だ。だがそれは上条の右手にのみ有効な能力。右手首を過ぎれば後は普通の人間なのだ。そして右手が打ち消せるのはあくまで『異能の力』のみだ。つまり超能力で発せられる電撃は打ち消せても、電撃が吹き飛ばした岩までは防げない。そんな能力。

「だいたい俺はお前と戦う気はない」

「ほう。余裕じゃない。強者の台詞ね。まあ、いいわ。アンタ超電^{ルガン}磁砲で知ってる」

一度スカートに手を入れ、メダルゲームのコインを掴んで再び出てくる。

「は？」

「理屈はリニアモーターカーと一緒に、超強力な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出す艦載兵器らしいんだけど」ピン、と美琴は親指でメダルゲームのコインを真上へ弾き飛ばす。

回転するコインは再び美琴の親指に載り、

「———こういうのを言うらしいのよね」

言葉と同時。

いきなりオレンジ色の光る槍が上条の横を通り過ぎた。

まったく反応できない上条は息を飲む。

まるで雷撃の如く、橋は焼き付いていた。「こんなコインでも、音速三倍で飛ばせばそこそこ威力がでるのよね。もつとも、空気摩擦のせいで五〇メートルも飛んだら溶けちゃうけど」

鉄橋が大きく揺れる。さっきまで頑丈だったこの鉄橋が急に頼りなく見えてくる。超電磁砲が通り過ぎた跡からは焦げ臭い匂いが漂う。

「———て、メエ。まさか連中追い払うのにソイツ使ったんじゃない？」

「……」

「ばーか。そんなわけないでしょ。私だって使う相手くらい選ぶわよ」

美琴の茶色い髪がさらにバチバチと火花を散らす。

「無能力（レベル0）を追い払うにゃコイツで十分でしょ、っと！」瞬間。少女の手から雷撃の槍が飛ぶ。もちろん上条にそれを避けられはしない。右手を突き出し、雷撃の槍を打ち消す。

（や、やべえ……。死ぬかと思った）

美琴本人にはとてつもなくすごい事に見えていても、実際は右手以外に振ればすぐ火だるまになる運命の上条には気がきでならなかった。

「そもそも俺はさっきの連中と同じ無能力（レベル0）。魔術すら使えない。一般科の生徒だぞ」

「だ・か・らそのアンタが私の電撃を防げる事がおかしいんでしょうが！」

また雷撃の槍が飛ぶ。上条は右手を前にだし打ち消す。

もう、怖くてしかたのない上条は必死に余裕の笑みを取り繕う。

「なんていうか、不幸っつーか……ついてねーよな」

上条は今日一日、四月六日の終わりをこう締めくくった。

たった人事で、本当に世界の全てに嘆くように。

「オマエ、本当についてねーよ」

不幸な少年（後書き）

どうだったでしょうか？

まだ一話目なので原作と同じ風になってしまいましたが、次からはオリジナルでやっていきますんでよろしく

不思議なシスターさん（前書き）

先に説明しておくところの『とある不思議の学園生活』はどちらかというとコメディ作品としてやっていくのでご了承願います

不思議なシスターさん

四月七日

入学式当日

上条の眠りはこれまであじわったことのない最悪の状況下で目覚める。

そこは『不思議学園』の学生寮の一室。

春なのに何でこんなに熱いんですかー、とエアコンをつけようとするがリモコンは反応せず、壊れたのか？そうするとまた電気屋に行つて買ってこなくちゃならないのか、と呟くとある事に気づく。

「まさか!？」

上条はすぐさま冷蔵庫に向かう。

ゆっくりゆっくりと手を近づけ覚悟を決めると冷蔵庫を一気に開ける。

懸念した通りだった冷蔵庫の中身は完全に死滅していた。二日前に買った物をしたばかりだったと言うのに。

その後もテレビやら電子レンジやらを含む電化製品が殺られていた事に気づいた。

非常食用のカップ焼きそばを食すことにした、が流し台に全てぶちまける。

外食をしようものならキャッシュカードを踏み砕く。

上条当麻は不幸だ。

「よーし。今日はいいい天気だし布団でも干すかー」

無理矢理自分を明るく取り繕う。激しく鬱だった。独り言を呟いている時点でもうアウトだ。上条はベランダに繋がる網戸を開ける。

入学式が終わって帰ってくるころには布団もフカフカになっている

だろう。

「空はこんなに青いのにお先は真っ暗♪」

ベッドの上の布団を両手で抱える。

せめて帰ってきたときに布団だけでも暖かく迎えてもらわねば、と思っていると、グニヤと何かを踏んづける。ラップでくるんだ焼きそばパンだった。あの殺られた冷蔵庫にあった品だ。

「……つか、いきなり夕立とか降ったりしねーだろーな」

かなーり嫌な予感がしつつ、上条は網戸からベランダに向かう。

と、すでに白い布団が干してあるのが見えた。

「?」

学生寮と言っても造りはまんまワンルームマンションなので、上条は一人暮らしだ。なので、この部屋でベランダの手すりに布団を引っ掛けるような人物は上条当麻以外に存在しない。なので、よくよく見れば布団なんて干してなかった。

干してあったのは白い服を着た女の子だった。

「はあ!?!」

両手で抱えていた布団がばさりと落ちた。

謎だ。しかも意味不明だ。女の子は、なんか鉄棒の上でぐったりバテてるみたいに、腰の辺りにベランダの手すりを押し付け、体を折り曲げて両手両足をだらりと真下に下げている。

歳は……十四か、十五か。上条より年下という感じ。外国人らしく、肌は純白で髪の毛も綺麗な銀髪をしていた。

そして服装は……修道服? か。教会のシスターが着ているような。

上条はその女の子について見入ってしまう。女の子は割と可愛らしい顔をしていた。上条は海外に知り合いはいないし行った事もないので、女の子の姿はまるでお人形のように見えた。

「オ、――」

女の子の、可愛い唇が動いた。

思わず上条は後ろに一步二歩と下がる。ぐにゅっと床に落ちた焼きそばパンを踏み潰した。もし英語なんか、外国語で話された日には英語成績最低の上条にはお手上げだ。

「おなかへった」

「……………」

上条は女の子の言ったことが信じられなかった。自分はバカだからついつい女の子の言葉を変に日本語に変換したのだ。こんなどう見ても外国人の女の子が流暢なそれでいて日本人の自分にちゃんと聞き取れるような日本語を話せるわけがない。上条はそう結論づける。「ねえ、聞いてる？」

だが、まだ上条の耳には女の子が日本語を話しているように聞こえた。

「ナニ？ひょっとして、アナタはこの状況で自分は行き倒れですかおっしゃりやがるつもりで？」

思わず上条はベランダにぶら下がっている女の子に日本語で聞いてみる。

「倒れ死に、とも言う」

日本語ペラペラだった。

「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれたら嬉しいな」

しかもかなり慣れていらした。下に目を向けると先程踏み潰した焼きそばパン。この子には遠い所で幸せになってもらおう、とラップにくるまれた潰れた焼きそばパンを少女の口元に突きつける。さすがにこの匂いを嗅げば嫌になって逃げ出すだろうと思っていると、

「ありがとうございます」

がつつりラップごと喰われた。ついでに上条の腕付きだ。

上条の一日は悲鳴と共に始まっていく。

「まずは自己紹介をしなきゃいけないね」

「……いや、まずは何であんなトコに干してあったのか——」

「私の名前はね、インデックスって言うんだよ」

「誰がどう聞いても偽名じゃねーか！ 大体何だインデックスって！ 『目次』かお前は！」

「見ての通り教会のものです、ここ重要。あ、バチカンの方じゃなくてイギリス清教の方だね」

「意味分かんねーしこっちの質問は無視かよ!？」

「うーん、禁書目録の事なんだけど。あ、魔法名ならD e d i c a t u s 5 4 5 だね」

魔法名。

その言葉に上条は聞き覚えがあった。上条の通う『不思議学園』では科学を用いた超能力開発の他に『魔術』も視野に入れて教えている。少し前から魔術の存在が証明され学園都市側でその知識を応用できないかとと交渉した所、何人が研修生として学園側を魔術師達が訪れその知識を広めていった。それから魔術は学園都市中に広まり今では無能力者達がこぞって魔術を覚えようとしている。今では人口の四分の一の魔術師達がこの学園都市の生徒として暮らしている。

魔法名。確か魔術師達の真名なんだそうだが、少し知識をかじった上条にはそれ以上よくわからなかった。

「——って、ことは。お前魔術師か？」

「うーん。そうなんだけど違うようなそうのよーな」

「どっちだよ!？」

ガラステーブルを挟んで目の前の少女と何をやっているんだろう。しかも、インデックスと名乗るこの女の子はこの部屋を妙に気に入ってしまったらしい。

「そんなことより、このインデックスにおなかいっぱい食べさせて

くれると私は嬉しいな」

「何だよ！ここでお前の好感度上げても上条さんの何の得もないのですが！？」

「あゝあ、おなかいっぱいにならないとインデックスは大きな声を上げちゃうかも。そしたら近所の人飛び込んできて君は大変な事になるね」

「それ脅してんのか！お前実はかなり腹黒いだろ！」

小さく首を傾げられた。

とぼけられた。

やりゃーいいんでしょうがー！ と上条は台所に向かう。どうせ冷蔵庫の中は全滅で生ゴミの山が散乱していた。こんなモン（生ゴミ）でも誰かの役に立つんなら本望だろ、と。フライパンに残り物を全部ぶち込んで野菜炒め風にしてしまう。

そう言えばこの子はどこからやってきたんだろう？

学園都市の中には当然のごとく魔術師が闊歩しているので珍しくはない。が、どうにも府に落ちない。

「で、何でお前はベランダに干してあった訳？」

悪意満々の野菜炒めにしょう油をぶち込みながら上条は少女に向かって言ってみる。

「干してあった訳じゃないんだよ？」

「じゃあ何なんだよ？風に流されて引っかけたんかお前」
首を横に振り少女は満面の笑顔作り言った。

「只、屋上から屋上まで一度飛び移ってみたかったんだ」

……………ハイ？

「でも飛び移るの失敗してここのベランダまで落っこちたんだ」

「アホか！！」

思わず上条は大声を上げてしまった。

「ム、アホかなんて女の子に対して言うのはかなり失礼かも。この国の人みんな君みたいに落ち着きがないの？」

「いや、アホだろお前。上条さん今まで生きてきて屋上から屋上に飛び移ってみたいなんて思う、そんな不思議少女はお前以外見たことねぇよ!？」

かなり簡単な理由だった。それでいてアホくさかった。

この辺りは安い学生寮が建ち並ぶ一角だ。八階建ての同じようなビルがずらっと並んでいて、ベランダが見れば分かる通りビルとビルの間は二メートルぐらいしかない。確かに走り幅跳びの要領で屋上から屋上へ飛び移る事もできると思うが……。

「だからって普通やるか？ 一歩間違えれば地獄行きじゃねーか」

「うん、私挑戦者だからね♪」

「なにお前はオリンピック選手がさらなる挑戦をするがごとく胸を張ってらっしゃるのですか!？」

ついついフライパンから目を逸らして少女を見る。本当に家に引つかかってくれて良かった。と、上条は半ば本当に思った。

「ごはん」

上条の後ろからいつの間にか移動してきたインデックスの顔が伸びてきた。

日本語は使えてもハシには慣れていないのか、スプーンみたいにグーで握ってフライパンの中をワクワクと眺めている。

「……………、あ」

で。フライパンの中には生ゴミ同然の食材をぶち込んだ野菜炒めモドキ（有毒）。

何か。横で楽しみにお腹を鳴らしている空腹少女の前に、コレをだすのは正直忍びなかった。

「あ、あーっ! けど、アレだ! お腹すいてるならこんな不味そうなモンより出前でもとうろう!」

「そんなに待てないよ?」

「……えっ!」

「それに、不味そうなんかじゃないよ。私のために無償で作ってくれたご飯だもん。美味しくないはずないんだよ?」

グサツと、上条に何やら罪悪感が襲った。こういう時だけシスターさんっぱくにつこりキラキラ微笑みやがった。

パクパク

「ほら、やっぱり不味くなんかない」

「……そ、そっか」

モグモグ

「なんか変にクセになる味だね」

「クセになる味？」

ムシヤムシヤ

「あれだよね、さりげなく疲労回復のためにすっぱい味付けしている所がにくいよね」

「げっ！すっぱ！？」

がつがつ

「うん、けどすっぱいの平気。ありがとうね、何だか君、お兄さんみたいだね」

向けてくるにつこり笑顔。ほっぺたにモヤシがくつつくほどの純心な食いっぷりだった。

「……ぐ、……う、う、ううおおおおおおあああああああああ！」

グバァー！！ と上条は音速でフライパンを取り上げる。ものすごく不満そうな顔をするインデックスに、地獄には俺が一人で落ちると上条は心に誓う。

「君もおなかへってるの？」

「……、は？」

「そうじゃないなら、おあずけなんかしないで食べさせて欲しいかも」

ちよっぴり上目遣いでハシの先をガジガジ噛むインデックスを見て、上条は悟りを開いた。

神様は言う、責任持ってお前が食え。

不幸がどうのという問題ではなく、完璧に自業自得だった。

上条当麻は、口の中いっぱい熱した生ゴミを詰め込んでにつきり微笑んでいた。

インデックスと名乗る少女は、むーっと文句を言いたそうな顔でビスケットをガジガジと噛んでいた。

「——で、お前はこれからどうするんだ？」

上条はとりあえずこの少女をなんとかするためにも聞いてみる。

「あっ、そうだった。私行く所が会ったんだ」

思い出した様にインデックスは立ち上がるとスタスタと玄関に向かった。

「おいおい待ってって。一体どこに行くんだ？」

上条も立ち上がりインデックスを止めるように修道服を手で触れる。

「早く行かなきゃ。怒られちゃうんだよ？ 何でも今日から学校って所に行って色々勉強するらしいんだよ？」 「お前『不思議学園』の転校生か？」

「違うよ。わたしは——」

その先の言葉は上条は聞けなかった。なせなら、インデックスの衣服がリボンをほどくようにストンと落ちた。

修道服の布地を縫っている糸という糸が綺麗に解けて、ただの布地に逆戻りしている。一枚の帽子のようなフードだけは無事で頭の部分にそれだけのつかている。

詰まり結論を言うとインデックスは完全無欠の裸の状態になった。

「きゃあああああああ」

インデックスと名乗る女の子は怒ると人に噛み付く癖があるらしい。「痛ったー……。あちこち噛み付きやがって、合宿ん時の蚊かお前

は？」

「……、」

返事はない。

素っ裸に毛布を巻いただけのインデックスは、女の子座りのまま修道服の布地を安全ピンでチクチク刺して何とか服のカタチに戻そうと（無駄な）努力をしている。

どーん、という効果音が部屋を支配していた。

「……あの、姫？ 僭越ながらこちらにワイシャツとズボンのセットがあるのですが」「……、」へびみたいな目で睨まれた。

「……、あの、姫？」

上条当麻はなんとかご機嫌を良くしようと声をかけてみる。

「……、なに？」

「今のは一〇〇%俺が悪かったんでせう？」

返事の代わりに目覚まし時計が飛んできた。ひい！と上条が絶叫すると同時、巨大な枕が襲ってきた。まったくありえない事にゲーム機や小型のラジカセまで飛んでくる。

「あれだけの事があったっていうのに、どうして普通に話しかけられるんだよう！？」

「あーいえ！ 私も大変ドギマギしておりますというか青春ですねというか！」

意味が分からん。確かあの時修道服を右手で振れたような気がするような、と上条は思い出す。

「バカにして……うううううううう！！ 大体何で『歩く教会』が破壊されるんだよ？ 君一体何の能力を使ったの？」

「なんだ？ 『歩く教会』？」

「そう。この服は極上の防御結界なんだよ。本来なら包丁が刺さっても傷一つつかないのに」

それでか、上条は納得した。つまりあの修道服は何らかの魔術がかけられており、それを上条の右手が触ってしまったのだ。

「いや、えっと実をいうと俺の右手の『幻想殺し』の能力だと思う

のですが？」

「『幻想殺し』？」

上条はちよつと戸惑った。

自分の幻想殺しについて、誰かに説明する機会は滅多にない。

「この右手で触るれば……それが異能の力なら、神様の奇跡だって打ち消せます、ハイ」

「……うーん。やっぱり超能力は信用できないんだよ」

「超能力じゃねえ。これは俺の生まれた時からある能力だ」

「信じられないんだよ。その能力が仮に超能力じゃないとしても、私は君みたいな魔術は見たことも聞いたこともないんだよ」実際、そんなこと言われても上条当麻には何も答えられない。生まれた時から持っている不思議な能力という認識しかないのだ。

「できた」

インデックスは地獄の内職で何とかカタチを取り戻した真っ白な修道服を広げてみせた。

……何十本もの安全ピンがギラギラ光る修道服を。

「……………（汗）」

「えっと、着るのか？」

「……………（黙）」

「着るのか、そのアイアンメイデン？」

「……………（涙）」

「日本語だと針のむしろと言う」

「……………う、うううううううう！！」

すいませんっ！ と上条は全力で床に頭突きして謝る。

「着る！ シスターだし！！」

良く分からない叫びと共に、インデックスはイモ虫みたいに丸めた毛布の中でもぞもぞと着替えていた。ぴよこん、と毛布から唯一出ている顔だけが爆弾みたいに真っ赤だった。

「……あー、なんかその着替えプールの授業を思い出すなー」

「……………何で見てるのかな？ せめてあっち向いて欲しいかも」

「別に良いだろ。さっきと違ってエロくねーし着替えなんて」

「……………」

インデックスの動きがピタリと止まったが、上条がまるで気づいていないようなので諦めてもそもそと毛布の中で着替えを続けた。毛布の中に意識を集中しているせいか、頭の上のフードがぽてんと落っこちでも全然気づいてない。

何となく、会話がないとエレベーターの中みたいに気まずい空気が漂ってくる。

「それで、これからどうすんだ？何か行かなきゃいけない所があるとか言ってたけど？」

「うん」

どーんという効果音を引きずったままインデックスはすくっと立ち上がった。幽霊のように上条の横をすり抜けていく。頭の上からフードが落っこちている事さえ気づいている様子がない。

のろのろと玄関のドアを出るインデックスを上条は追い駆ける。

「ちょっと待てよ。お前危なっかしいからそこまで一緒に行こう――

――ぐぎゃあ！！」

インデックスをそこまで送ろうと玄関を出ようとしたところドア枠に足の小指が直撃した。

片足を押さえて奇声を上げる上条に、ビクンとインデックスが振り返る。あまりの激痛に大暴れしようとした上条のポケットからスルリと携帯電話が滑り落ちた。あっ、と気づいた時には固い床に激突した液晶画面がビキリと致命傷な音を立てる。

「ふ、不幸だ」

「不幸というより、ドジなだけかも」ちょっとだけインデックスが笑った。「けど、幻想殺しっていうのがホントにあるなら、仕方がないかもしれないね」

「……、どうゆうこと？」

「うん、こういう魔術的な事は君みないな人に言っても仕方ないけど」インデックスはくすくすと笑って、「神様のご加護とか、運命

の赤い糸とか。そういうものがあつたとしたら、君の右手はそういうものまともに消してしまっているんだと思うよ。」

インデックスは安全ピンまみれの修道服をひらひらさせながら、『歩く教会』にあつた力も神の恵みだからね、と言った。

「待てよ。幸運だの不幸だのって言葉は、確率と統計のお話だせ？んなのある訳……、ッ！」

言った瞬間、ドアノブに触れていた上条の指に壮絶な静電気が襲いかかった。な！？と反射的に体をビクンと震えると、筋肉が変な風に動いたのか右足のふくらはぎがつった。

しばらく悶絶する上条。

「……………しすたーさん。できればごせつめいを」

「君の右手の話が本物ならね、その右手があるだけで『幸運』ってチカラもどんどんけしていつてるんだと思うよ？」

「……………つまり、あれですか」

「君の『右手』が空気に触れてるだけで、バンバン不幸になっていくって訳だね♪」

「ぎゃあああああああ！！ふ、不幸だあああああああ！！」

上条は今までのなをしようにも『不幸』につきまとわれた人生を歩んできた。つまるところインデックスの言葉は上条当麻の人生感を完全に肯定させていた。

そんな上条をにこにこ聖母の微笑みで眺めている純白のシスターが一人。

「何が不幸って、君。そんな力を持って生まれてきちゃった事が不幸だね♪」

にっこり笑顔のシスターに思わず涙の上条は、ようやく話がズレてる事に気づく。

「ち、違う！そんなことよりもお前一人で大丈夫か？」

「うん。大丈夫」

「そうか。じゃあ、なんかまた困った事があつたら、また来て良いからな」

「うん。おなかへったら、またくる」

ひまわりみたいな笑顔でインデックスは上条に見せ、ささーと走り去って行った。

何だか台風みたいな子だったな、と上条は部屋に戻ろうとすると、「ひゃ、一体これは何なんだよ。もしかしてがくえんとしが作った機械化された使い魔なの？」先程のシスターさんの大きな声が聞こえた。

上条は心配になり見に行こうかと思ったが、止めた。あまり変に世話を焼いてもむこうは迷惑だろう。

「……………つか。インデックスの奴、人の部屋を散らかしたまま行きやがったな」

部屋の酷い散乱状態を見て仕方なく片付けを始めた上条。その時、手に目覚まし時計を手にとる。

「……………、」

上条は目覚まし時計を凝視しながらその場で固まってしまった。自分の見たものが信じられなかったのだ。上条はそれを確認するように読み上げる。

「……………八時五〇分」

今日は入学式だ。ついでに入学式が始まるのは九時だ。

「遅刻だあああああ！！そして不幸だあああああああ！？」

これにより上条は結局入学式に遅刻した。

不思議なシスターさん（後書き）

ほぼ、まるパクリです

次回からは完全なオリジナルになるのでよろしくお願いします

上条の日常（前書き）

今回は完璧なオリジナル回です

おもしろくないかもしれせん

変な箇所はご指摘くださるとうれしいです

上条の日常

現時刻 九時二〇分

『不思議学園』は科学と魔術の全てを詰め込んだ進学校だ。

小・中・高の一貫校で学園の広さ、人数は世界ナンバー1。

そのため入学式は校内放送を使ってそれぞれのクラスで行われる。

「えー、そういう訳で我々学園都市側は——」

かれこれ三〇分以上もの間『不思議学園』校長の話は続いていた。だが校内放送のためクラスのほとんどの生徒は話を聞いておらず、楽しくお喋りをしていた。

上条当麻も教室の窓際、一番後ろの席で、入学式の後の予定を考えながら窓の外を見ていると右の席から話しかける人物がいた。

「そんでもってカミヤん。実際の所どういう事や？」

上条の悪友にしてクラス三バカデルタフォースの一角青髪ピアスだ。普段からエセ関西弁を喋り、口を開いては萌えだの何だのとのたまわる変態だ。

「どういう事って何だよ、いきなり？」

上条は振られた話題が分からず聞き返す。

「カミヤんがただ遅刻する訳ないやろー。今回はどこの幼気な少女を苛めてきたん？」

「人をそんな安っぽいキャラ設定にするな！」

「何々、どうしたぜよ？俺もちよろっと混ぜらせてほしいのにゃー」
今言ったのは上条当麻でも青髪ピアスでもない。その声は上条の前から聞こえた。金髪にアロハシャツ、どう見ても学校にいるときの格好ではない。上条の第二の悪友にして三バカデルタフォースの二人目土御門元春である。

「おっ、土御門もカミヤんの遅刻した理由について考えようや？」

「カミやんが遅刻した理由か？ そんなの当然、道でぶつかって倒れた幼気な少女に手を伸ばし、『大丈夫か？ 悪いいな。ケガさせちまって』と言って少女を立たせなんだで、カミやんは少女を助け風のように去っていく。そして残された少女のハートをわしづかみって、ところかきゃー」

そして三バカデルタフォースの最後の一角である上条当麻はこの同類どもの言った事が激しく心外だった。

「お前も人を旧式の恋愛ゲームみたいにな、俺のキャラ設定を落とすな！」

第一そっちの方がどれだけ楽だったか、上条は朝のやりとりを思い出す。ベランダに突然現れて、家を散らかし、風のように去っていったインデックスと名乗る少女。彼女は一体どこへ行ったのだろうか？ 無事に目的地に着いただろうか？ 上条は目は空に向けぼーっと眺めた。

「なんや？ カミやん。その遠くを見る目は？ 本当に何があったんか？ ものごつつ気になるで」

「むむ。さては俺が言った以上の事がカミやんに起こったんだにやー」

青髪と土御門の声を上条は聞いていなかった。

「はい、みんな。静かにするのですよ。まだ入学式は終わってないんですよ」

まるでその容姿は完璧な小学生。赤いランドセルがよく似合い、黄色い帽子を被っていそうな超ミニマムサイズの先生月詠小萌はで背伸びをしながら教卓を叩く。

一瞬で教室内は静かになる。

「みなさんが校長先生の話を書かないのは先生にもわかりますけど、だからと言って遊んでいい訳ではないのですよ。みなさんはもっと学生としての――」

今度は小萌先生のお説教が始まった。正直生徒達にはこっちの方がこたえた。一応年上の先生と言ってもそのサイズ見た目含め完全な

小学生。

生徒達からしたら小さい子供に怒られている不思議な空間ができる。

「先生。上条君が窓の外の女の子に夢中になっておりまーす」
青髪はそう言うのと上条はぐると視点を小萌先生に向ける。

「……、」

沈黙していた。そして、まぶたには涙がこぼれていた。

まるでサンタクロースをまだ信じている子供に、サンタなんていないだろう、と言って泣かせた感じだ。

クラス中の敵意ある視線に上条は突き刺さされたのだった。

「まったく上条！また貴様のばらまく菌のせいでクラスみんなが迷惑してるじゃない！」

うん？上条は声のする方を見ると一人の少女が明らかに敵意を示すように睨みつけていた。長く整えられた黒い髪から大きく見えるおでこ、長袖のセーラー服からも見える大きな胸。

吹寄制理。

上条の中学時代からの知り合いで、対カミジョー属性完成ガードの女にして美人なのにも色っぽくない鉄壁の女と言われている。
「——ってか、みんなの前で人をばい菌みたいに言うお前の方が迷惑だろ？」

上条当麻は心の広い人間だ。例えば、ばい菌のように罵られても平然と言葉を返せるのだ。

「あたしは注意をしているの！貴様なんかと一緒にしないでくれる？」

「あんな。上条さんも一応血のかよった一人の人間なんだよ！そんな風に罵倒されたら心が折れちまうだろ！」

「貴様の心なんかこの際だから木っ端みじんになれば良いのよ！」

「お前『注意』とか言ってるけど只俺をいじめたいだけだろ！」
いつもならこの口論はかなり続くのだが、

「…………二人…………とも、…………ひつ…………く…………せん…………せい…のは…なしを…………き…いて…………ぐすんっ」

小萌先生が泣きじゃくり始め、今度は上条と吹寄にみんなの痛い視線が向けられた。二人は口を閉じ前に向き直る。

「分かってくれましたねー」

と、さっきまでの顔が嘘のように小萌先生は満面の笑顔に戻りお説教を再開した。

（カミやんはええなあ。小萌先生にそんなにいじられて羨ましい限りやね）

右の席から青髪は小声で聞いてきた。

青髪ピアスは小萌先生のような幼女にいじられるのが好きでたまらないようだ。

（なあ、カミやん。ちょっとで良いからカミやんのそういう属性分けてくれへん？）

（……………、）（なあーカミやん）

（……………、）（カミやんちゃん）

「気持ち悪いわ！」

思わず叫んでしまった。

しかもその声は教室内に強く響いた。

まずいな。

やわらんできたみんなの視線が再び上条のみに向けられる。

「もー。上条ちゃんには仕方がないですね。何度注意しても反省の色すら先生には見えないのですよ♪」

そして小萌先生は満面の笑顔のままに近づき、

「そんな上条ちゃんには先生から入学祝いの宿題プレゼントなのです♪」

どこから出したのか山のようなプリントを上条当麻の席に置いたのだった。

十時四〇七分

校内放送を用いたエセ入学式も終わり、入学祝いの宿題をバックに詰め込むと「カミやん。今日どうする？わい、今日発売のマジカルパワードカナミンの二〇個限定ドレスアップセットを買いたいんやけど付きおうてくれへん？」と言う青髪ピアスの提案に上条はハイハイまた今度な、と返事をし上条はささーっと荷物をバックに詰め、教室を出た。今上条に青髪に付き合う時間はなかった。今日は壊れた家電製品を直さなきゃいけないし、新しくキャッシュカードを再発行しなきゃいけないし、携帯電話も買い直さないといけないし、……………と上条当麻には予定が山積みだった。長い廊下を走り抜け上条当麻は階段を降りた時だった。

「うおっ!？」

右足がもつれ下に思いつ切り転んだ。しかも目の前には女の人がいる。これじゃあ巻き添えをくらう、とどうにか避けてと願い目を閉じる上条。その女の方は避ける仕草もせず、大きな刀を取り出すと『七閃』と言った。

「……………?」

おかしかった。もう床に落ちてもいい筈なのにいつまでたっても衝撃がこない。恐る恐る目を開ける上条。すると上条の体は宙に浮いていた。性格には複数のワイヤーが上条の体重を空中で支えているのだ。

「危ないじゃないですか。私だから良かったものの一步間違えればケガ人が出ていた所です」

女の方はTシャツに片足だけ大胆に切ったジーンズという格好だった。女の刀が一瞬ブレて見えると上条を支えていたワイヤーが解かれた。どさっ、と上条は床に落ちる。

「いっ——つう!？」

「感謝してください。私が支えなかったらあなたはどのようなケガではすみませんでしたよ」どうぞ、と女は手を差し伸べた。上条は

その手を取りゆっくり立ち上がる。

「ありがとうございます。…………えっと……、」

「神裂火織、と申します」

「ありがとうございます。神裂先生」

ぴくっと神裂が妙に震えた。握られた手に力が加えられている。

「……………今、なんと？」

「えっ、神裂先生って……………、っていたい。いたいです!？」

「私はまだ十七です。それと私はこの学生の一人です」

「う、うそーん!先生それはさすがにサバ読みすぎでしょ!だってどう見ても結婚適齢期過ぎちゃってるようにしか見えないひいひいいいいっ!？」

神裂は握っていた手を即座にはなし、持っていた刀を鞘から抜くと上条の右頬に突きつけた。

「私の『七天七刀』の切れ味……………味わってみますか？」

「す、すいません。神裂センパイは大人っぽくてとても素敵でわかりませんでしたあー!？」

怖がっている上条の顔を見た神裂は何だか大人気ないと思い刀を鞘に戻した。ふう、助かった上条は大きく息をはいた。

「とにかく、今後は気をつけてくださいね。えっと……………」

「上条当麻だ」

「上条当麻。これにこりたら階段で駆けたりするのは止めにする事です」

わかりましたか?、と言うと神裂はその場を去った。

はあ、と安堵すると当初の目的を思い出し上条は歩き出した。

不思議学園はいくつかのブロックに分かれている。まず最初に上条のような無能力(レベル0)から低能力(レベル1)が通う『普通科』。

二つ目に御坂美琴等の異能力（レベル2）以上の超能力者が通う『科学科』。

三つ目は魔術を持つ魔術師が通う『魔術科』がある。

それぞれの学科で教えてもらう事はかなり違う。

もしも『普通科』なら科学と魔術、両方の知識を得る事ができるが同時にそれ以上の事は何もしない。『科学科』ではレベルアップのためにあらゆる『時間割り（カリキュラム）』を受け、さらなる能力の向上を計る。『魔術科』は魔術の歴史やルーンの描き方等を覚えていく。

そして最も違うのはその待遇の差、『科学科』の生徒はそのレベルに応じた高級な部屋が用意され奨学金もただになるという。

対して『魔術科』も実力が認められればそれに応じた待遇が用意される。

だが『普通科』の生徒は違う。どんなに頑張っても努力しても待遇はよくならない。偶に『普通科』の生徒が『科学科』に移動になる事があるらしいが、それは例外中の例外であり、まして無能力（レベル0）の上条当麻には全く関係なかった。

「……はあ。良いよな。『科学科』の学生寮」

キャッシュカードの再発行、携帯電話の買い直しと続けて行い、気づいたら夕方になっていた。肩をぐったりと落とした上条は、科学科の高級マンションを思わせるような学生寮を羨ましそうに見ていた。

「ああいうトコに一回でもいいから住んでみたいよな」

だが、上条は考え直す。もしあのマンションに住んでも、今日みたいな事がたびたび起こる上条の不幸体質では高級な分さらに大変な事になりそうだ。

はあ、と暗い息を吐く。

「ちよっとアンタ！ 待ちなさい！」

これからまた電気屋を呼んで、電化製品全般の修理を頼まなければならぬとなるとひどく憂鬱だった。物によっては買い直さなければ

ばいけないのもあるんだろうな」と上条は自分の財布の中身を確認する。

三五〇円。

上条当麻の全財産。

通帳からお金を引き出さないと、と空をぼつと眺める。

「待ちなさいって！アンタの事よ！止まりなさい！」

「おっ、そうだ。今日は入学式の記念に高級ランチでも食べて明日への活力にしよう」

「人の話を聞けええええええええええ！！」

気づいたら超能力（レベル5）の御坂美琴が上条に向かって静電気のようなものを放っていた。

「うわっ！？」

ようやく美琴の存在に気づいた上条。

「またか。ビリビリ中学生。お前もいい加減暇だよな。さっさとカレシでも作って、青春に花でも添えてみてはどうかね？」

「うっさいわね！？アンタなんか言われたくないわ！それに私は作れないんじゃないかって作ろうとしないだけだからいいのよ」

それよりも、と美琴は続け、

「私と勝負しなさい！！」

堂々と言った。仮にも年頃の女子中学生が高校生を捕まえてこの台詞はないだろう、と上条は今時の教育にちよつとした疑念を抱きつつ言った。

「イヤだ」

「こ——の、ざっけんな！？」

と、美琴は勢い良く歩道を踏みつける。ビリッと近くの人の携帯電話の液晶画面がパリンと音を立てて割れ、近くで作業していた警備ロボも次々に倒れプスッと黒い煙が立ち上った。

「ふん。どうよ、これようやく頭のスイッチをきりかえられ——
——むぐっ！」

と、余裕をたたえた美琴の顔を上条は覆い隠すように手で抑える。

（お願いだから静かにしてくれませんか？御坂さん本当に。携帯電話ならまだしも清掃ロボを破壊したなんて事になったら俺の財布の中身が大変な事になるんだから。ただでさえ不幸なのにこれ以上不幸になってたまるか！？）

と、祈りが通じたのか美琴が詰め寄る事はなかった。

次の瞬間、警備ロボは音甲高い警報を辺り一面に鳴り響かせた。

もちろん逃げた。

追いかけてくる警備ロボを尻目に裏路地に逃げ込む上条と美琴。それでもまだ追ってくる警備ロボ。さすがは学園都市の最新技術で作られたロボットだな、と上条は感心してしまう。

気づいたら上条と美琴は息を荒げて公園のベンチに座っていた。

時間を見るため今日買ったばかりの携帯電話を見る。液晶画面が割れていた。多分先程の美琴が発生させた電撃のせいだろう。

「うう。——こ、こんなのと関わったばかりに」

上条は

「こ、こんなのはどういう事よ！」

「……………自分の胸に手をあててよく考えてみなさい」

その言葉に美琴はうーん、と考える仕草を取ると

「分からないわね」

キッパリ断言した。

「お前のせいで家の家電製品は全滅したんだぞ！それにさっきのビリビリで買ったばかりの携帯電話が煙を噴き出しちゃったわあ！！」
コレには優しさの塊、上条当麻でも我慢の限界だった。

「べ、別にいいじゃない。これでお互い引き分けてことでしょ」
まるで自分の非を認めない超電磁砲少女に上条はついに、

「……………（泣）」

「な、なに涙目になってるのよ。いつものアンタらしくないわよ！

——って、わ、わかったから弁償するから、そんな子犬みたいに
目をウルウルするのは止めなさいっ!!」
携帯電話を買い替える事に成功した。

上条の日常（後書き）

どうでしたか？

私としては頑張りました

色々考えたのですがそれぞれのキャラクター達との絡みが少なかつたなあとかオリジナルに見えて原作と被ってる部分がほとんどだと思います

ですが自分なりにがんばるので今後ともよろしくお願いします

風紀委員と聖徒会（前書き）

多分いや、かなりのダメ文になったと思われますが変な所があったらご指摘ください。

オリジナルでかなり、短いですがよろしく願います。

風紀委員と聖徒会

上条が不幸な一日を過ごしている同じ時

『風紀委員会』不思議学園支部

風紀委員の会議が行われていた。

「今日の議題は最近頻繁に起こっている原因不明の爆破事件についてです」

会議は主に『能力者』による事件について話し合い、傾向や対策をする。

「被害にあったのは不思議学園小学生科学科内のコンビニ。爆破したのはコンビニに設置されているコピー機。幸い死傷者はいませんが負傷者が三名。すぐに病院に運ばれましたが、未だ意識不明です。詳しい詳細は書類を確認してください」

眼鏡をかけた高校生くらいの少女が立ちながら手に持つ紙を読み上げる。

二ヶ月前から不思議学園では妙な爆破事件が起きている。

（これは酷いですわね）

風紀委員の一人白井黒子は書類を難しい顔をしながら見ている。白井も何度か事件に出くわして現場を見てきたのだが、今回ののは特に酷かった。コンビニ内は写真で読み取れるぐらいに焦げついていて、もうそれは原形を留めてはいなかった。事件が起こった二ヶ月前は、ほんの小さな爆発だけだったのだが、事件が起きる度に爆破の規模が大きくなっていったのだ。

（犯人の目的は自分の力の誇示、というのが妥当な気がしますですが何か引っ掛かりを感じてなりませんわね）

白井は会議中ずっと頭の中で考えを巡らせていた。

会議が終わった後も席に座ったまま白井はずっと唇を尖らし、うんと唸っていた。

「白井さん。どうしたんですか？ 難しい顔して」

声をしたほうに目を向けるとセーラー服の似合わない幼い顔つきの少女が横に立っていた。白井に話しかけてきたのは同じ風紀委員初春飾利。頭にはいつもぼたん等の花の飾りをつけているのが特徴だ。「あー！ もしかしてまた御坂さんに何かいやらしい事をしようとか考えてたんじゃないですね？」

「ア・ナ・タは私がいつもいってもそんな事を考えてると思いますの？」

白井は空間移動テレポートで初春の後ろに周りこむと初春のこめかみに両の拳を当てグリグリどひねりを加える。

「い、痛い！ 痛いですよ、白井さん。冗談です！ 冗談ですから！」と、初春の言葉に両の拳を離す白井。彼女たちは共に中学一年で同じ学校に通っているにも関わらず明らかな上下関係が出来あがっている。それは白井が大能力（レベル4）を持つ科学科の優秀な生徒であるからに他ならない。

白井は手に持つ書類を見ながら、遠くを見るような顔をつくる。

「別にお姉さまの事を考えて難しい顔していた訳ではありません。先の会議の事でちょっとした違和感を感じたので自分なりに考えていたんですの」

「爆破事件の事ですね。でも、違和感なんてありましたか？」

初春は白井の言ったような違和感を感じなかったようだ。

「初春。アナタ、ちゃんと資料を呼んだんですの？」

初春は手に持つ書類を見返す。見た限り、わかるのは今までの爆破の規模、被害にあった場所、負傷者の数、等だ。

「わかりません」

キッパリ言った初春に白井はしょうがないと言いたそうな顔を作ると、

「全ての爆破が原因不明と書かれていますの」
資料の『原因不明』と書かれたところを指差す。

「あっ!?!」

初春にもようやくわかった。

学園都市は科学の最先端技術を持つ。そして学園都市の外と内とは二十年から三十年の開きがあり、その一つである『能力開発』はあらゆる『時間割り（カリキュラム）』によって能力を得る事ができる。得た能力等は全て学園都市のデータベースに保存され、誰がどんな能力を使い、どの程度のレベルなのかも簡単にわかるようになっていいる。学園都市の最先端技術を使えば、使った能力の痕跡等から能力者本人のデータをすぐ解析できるのだが、今回はその痕跡から能力者を割り出す事が出来ていないのだ。そこが白井の感じた違和感だった。

「これを考えると、やはり『能力者』こちらがわと言うよりも『魔術師』あちらがわが事件を起こしている可能性の方が高いですわね」

科学側には魔術側の情報を一切知らされていない。科学で能力者の詳細は分かっても、魔術師の事は何も分からない。科学科の生徒である白井も何もわからなかった。

「私は普通科ですが、魔術といっても歴史的な事しか知りませんから」

と初春の言葉に白井は顔を歪めた。

すると

「仮にそうだとしたら科学側の私達には情報が少なすぎる。これは一度情報交換が必要ね」

近くで話を聞いていた風紀委員の一人固法美偉が会話の中に加わる。固法は白井や初春の先輩で科学科の高校二年生。どんな時も冷静に物事を考える思考を持ち、みんなから信頼を得ている優秀な風紀委員だ。

「固法先輩。私は聖徒会との合同会議を希望しますわ」

聖徒会

通称『聖なる加護』

言うなれば科学側の風紀委員のようなものだ。魔術師のみで構成され、魔術師のためにしか動かない魔術機関。

「そうね。でもあちらが果たしてこちらの要望に素直に答えてくれるかしら？」

固法は聖徒会という組織をあまり信用していない。それと言うのもその存在があまりにも謎に包まれているからだ。それは科学側の生徒が魔術側について知る機会ほとんどない事が起因している為である。だが、魔術側の人間は科学側の情報をいつでも好きなように引き出せる。この違いこそが固法の不安を大きくしている。

「ですが、そんな事を言っていてはいつまでたっても、事件の解決は出来ず負傷者が増え続けます」

「……………そうね。わかったわ。初春さん。さっそくで悪いんだけど聖徒会に合同会議の要望を頼めるかしら？」

白井の言葉にしぶしぶ同意する固法。

「はい！」 駆け足で初春はパソコンデスクに座ると、聖徒会に連絡をしようとしたのだが、

「初春さん違う！」

「へ？」

「聖徒会にはこれで連絡をするのよ」

封筒と便箋を手にとり初春に渡す固法。

「……………?」

「……固法先輩？」

「ち、違うのよ！別にふざけてるんじゃないじゃなくて聖徒会に連絡するには手紙じゃなきゃいけないのよ！」

メールや電話という技術が魔術側がない、という固法の説明に、流石にコレはないだろう、と怪訝な様子で初春は封筒と便箋を受けとり、白井も苦笑せざるをえなかった。

その日の夜

『聖徒会（聖なる加護）』

魔術師がよく使う教会のような場所。本来なら建物はその場所に見合うように作られる。だが、その教会は見合うどころか高層ビル群の真ん中に建てられているため、その場所だけまるで別空間のように見える。つまるところかなり違和感を感じずにはいられない。魔術師ステイルⅡマグヌスもその光景を呆然と眺めていた。

（もう少し。どうにかならなかったものか）

と、考えながらステイルは大聖堂に入る。

中には同じ聖徒会のメンバーの一人神裂が一番後ろで座っていた。

「科学側から要請がありました」

静かにゆったりとした口調で話す神裂。

「聞いたよ。科学側の人間が原因不明の爆破事件で何人も負傷しているって」
アークレシヨツプ

「最大主教はその件はそちらにいるあなた方に任せるとの事です」
はっ、とステイルは不敵に笑うと

「勝手な事を言ってくれる。もしも科学側といざこざが起きればどうなるかわかっているだろうに」

煙草に火をつけ口にくわえる。断つても科学側の上層部からの圧力がかかり今まで以上の待遇は期待されず、学園都市内の動きが制限される。もしかすると学園都市から魔術師達が追い出される可能性もある。引き受けても何か失敗を起こせば同様の事が起こる。魔術側としてはやっと科学側と交渉して生まれた今の状況を変えたくない。

「では、風紀委員との合同会議は決定ですね。他の者には私から伝えましょう」

神裂は立ち上がりさーっと教会から出て行く。

一人残されたステイルは煙草を吸い終わると続けて教会を出て行った。

風紀委員と聖徒会（後書き）

どうでした？

下手なら下手とハッキリ書いてください。

どんな現実も受け止めるのでどうかよろしく

動き出した組織（前書き）

更新遅くなりました

かなり駄文ですが長い目で見守ってください

動き出した組織

上条当麻は壊れた携帯電話を直す為、御坂と共に電気街に来ていた。電気街は日が落ちたにも関わらずまるで昼間のような光をギラギラ放っていた。学園都市の電気街は別名『オタク街』とも呼ばれており、その手の人がよく集まる。

「また、ここに来るなんて。……………不幸だ」

上条当麻は何度めだろう、と考えながら電気街を歩く人をじっと見ている。何故上条がこの様な場所にいるかというと、それには理由がある。

数時間前

上条の携帯電話を直そうと普通の電気屋行ったところ『すみません。こちらではこの携帯電話を直すことが出来ません』と女性店員に言われ『専門のお店をご紹介しますのでそちらでお直してください』とニッコリ笑顔を浮かべたのだ。どうする？ と御坂に言うところ「じゃあ。その専門店ってところに行ってさっさと直しちゃいばいいじゃない」との言葉が返ってきたので、電気街までわざわざ足を運んでやってきたのだ。

電気街に着きお店を見つけるのはそう時間は掛からなかったが携帯電話を直すのに時間が掛かった。何でも携帯電話は御坂の電撃によってかなりやられていたらしい。こうなると買い直せば安いのだがつい先程買ったばかりの携帯電話を処分するなど上条当麻の頭にはなく結局直すという結果にいたった。そこで責任を感じてか『私がここで待ってるからアンタはどうかその辺でもぶらついてきていいわよ』と御坂が言ったので現在適当にその辺をぶらぶらと歩いている。ゲームセンターが視界に入ったが上条当麻のおサイフ事情を考

えるとまったく手がでない。はあ、と頭を抱えていると目の前に四台もの清掃ロボがたむろっていた。四台とは珍しい。本来どんな汚れも素通りしただけで一瞬でピカピカにする清掃ロボ。それが四台も必要になるとはどんな汚れか想像できない。チラッと清掃ロボの隙間を覗くと……………!!

白い修道服を着た見慣れた銀髪少女が倒れていた

上条はすぐに清掃ロボをはねのけインデックスを抱き上げる。

「おい!!! インデックス大丈夫か!？」

無我夢中で呼び掛ける上条。

「……………お……………」

ゆっくり目蓋を開けるインデックス。

「インデックス!」

「……………お腹減った」

「またかよ!」

心配して損した。

「なんだろ…………おいしそうなうにがみえる…………ちがうくりのいがだ。おいしそう…………いただきます!？」

「えっ。まさか…………ち、違う。違うぞ。」

お前が見ているのは決してうにでも栗のイガでもなく上条さんのあたまアああああああー!？」

「がつがつ……………本当にありがとう…………かも。がつがつ……………当麻には……………なんだかんだで二度も危ないところを助けてもらって」

「食べるか喋るかどっちかにしなさい」

上条は『超機動少女カナミンフィギュアセット絶賛発売中』という触れ込みの看板が置いてあるいかにも青髪が好きそうな店の前にあるベンチに座っていた。隣に座っているインデックスはカップラーメンを抱えて美味しそうに食べていた。上条はその光景を横目で見ながら右手にあるレシートを見る。それには品名『今世紀最大最長サイズびっくり仰天業界初の最高に美味しい味噌ラーメン』とありその横に値段一七八円とあった。上条はため息をしつつポケットにあるサイフの中身を思い出す。一七二円。それが現時点で上条当麻の懐に収まる金額だった。

彼は思う。

「不幸だ」

「ちよつとアンタ!? 一体何やってんのよ!?!」

うん、と上条が前を向くと片手に袋をぶら下げた御坂がプルプルと秒刻みに震えながら怒鳴っている。

「おー。サンキュービリビリ」

「サンキューじゃないわよ!? 私がわざわざアンタの携帯を直すためにこんな訳の分からない所まで来てお金まで払ったっていうのにアンタは女の子と楽しくおデート中かつ!?!」

「別にデートしてたわけじゃねえよ。偶然そこで会ったんだよ」

「ねえ。とうま」

インデックスは上条の袖を掴んでゆさゆさと揺らす。

「ほほう。偶然そこで会ったねえ。アンタとはやっぱり白黒はつきりつけなきゃいけないわね!」バチバチと御坂のこめかみから青白い光がほとぼしる。

「ちよつと待った! こんな所で前らの能力なんて使ったらどうなるかわかつテンだろ!」

「大丈夫よ。ちゃんと手加減するから」

「ねえねえ」

「くそっ！やるしかないのか！？」

「フン。やっとやる気になったみたいね」「ねえ。とうま」

「何だよインデックス？悪いけど今お前の話を聞いてやれねえから後にしてくれ」

「この品のない女はだれなの？」

「今この状況でそれを言いますか！？」

「だって私この人の名前知らないし。品がないのは事実だし」

「確かに品はないけどコイツはコイツで良いところが……………」

……」

「だ・れ・が品がないですって。二人して言いたいこと言ってくれるじゃない」

「えと…………御坂さんアナタの周りから何やらものすごいほどの電撃が見えるのですが！」

「うっさい！！」

御坂のこめかみの光がはじけた瞬間

ドン！！と目の前のビルから爆発音が響いた。爆発音で窓ガラスが割れ、中から黒い煙が上がる。やがてビルから次々に人が出てきた。

「ビリビリお前じゃないよな」

上条はそうでないと思いながら御坂に聞く。

「ンな訳ないでしょ！？私があんな事すると思ってるの？」

御坂の言葉にほっ、と胸をなで下ろす上条。

「……………って早く警備員か風紀委員に連絡を……………」

ジャッジメント アンチスキル
風紀委員と警備員は学園都市の治安を守る組織だ。違いがあるとなれば風紀委員は学園都市に通う学生のみで構成されていて、警備員は教師達で構成されている。

「その必要はないみたいよ」

ほら、と御坂が首で方向を示すと警備員の乗る装甲車すでに見えた。装甲車が到着すると七人八人の警備員が出てくる。

「よかった。これでなんとか………って、あれ？」

上条は何かに気づいたように辺りを見回す。そこにはさっきまで自分の近くにいた者がいない

「どうしたのよ？急にキョロキョロして？」

「インデックスは？」

「これは………」

インデックスは爆発の起こったビルの中の一室にいた。爆発の後は酷く中には巻き込まれて服が焼け焦げている人が何人もいた。同時に爆発によって火が着火し部屋全体を包んでいた。部屋の中にはいくつもの『魔法陣』が描かれていた。インデックスは床に描かれた一つ魔法陣に手を振れる。

「やっぱり。ルーン………属性は炎、色彩は………」

「へえ、禁書目録ってのはそれだけで魔術の事がわかんのか。便利だな」

魔法陣を見るのに夢中になっていたインデックスは背後に迫っていた人影に気づかなかった。ひゅい、と振り向くとそこには少年が立っていた。学生服が所々擦り切れ、良く言えばワイルド、悪く言う汚らしい服装をしている。被っている大きさの合っていないキャップ帽子をくいと上げ、インデックスをまじまじと見る。インデックスは彼が何者かわからないが確実に敵である事は理解した。

「あなたが魔術を？」

「あー。魔術を使ったのは俺じゃねえ。第一科学側の人間が魔術なんか使ったらどうなるかわかってんだろ。禁書目録」

少年の威圧的な目に息を飲むインデックス。

少年はポケットに手を入れると白いチョークのような物を取り出す。

「俺がやったのはコイツで魔法陣を描くところまで。後は遠隔でアイツが魔術で……ボン。アツヒヤヒヤヒャー。最高だな。魔術つてのはよ。そして計画通りお前を誘い込めた」

「!?」そうか。インデックスは今気づいた。魔術師が何故このような場所を襲ったのかを。爆発のしたこの場所から魔術の力をインデックスに感じとらせ誘いだすこと。

「じゃ。無駄話しは止めてそろそろ仕事に取りかかるか」

瞬間、インデックスの視界から少年の姿が消えた。消えたというよりはだんだんと姿が部屋の景色と同化していった。超能力の一種だろうか、とインデックスは考える。だがどんな能力かは彼女にはわからない。そして首に突然ガツと痛みが走る。

(意識が……………)

そこでインデックスは意識を失った。

少年はインデックスを片手で持ち上げる。「ヒヤヒヤ。さあて、後は禁書目録を持っていけば任務終了」

少年は歩き出した。

警備員がやって来るのも時間の問題だな。少年は持ち上げたインデックスも景色と同化させる。階段を駆け上がる警備員の横を何事もないように避けていく。『色迷彩』カラーカモフラージュ。自分の体や触れている物全てを周囲と同化させる超能力。そのため少年やインデックスの姿をすれ違う警備員は誰も見えてはいない。

少年と共に同化しない限りその姿を視覚では捉えられない。

少年はビルから堂々と現れる。警備員がすでにビルを立ち入り禁止にしテープが貼られていた。人ごみがビルの前であふれ、その様子を楽しんで写真を撮っていたり、恐ろしい、と言ってキャツキャツと騒いだりしていた。

この隙に少年はインデックスを抱え、立ち入り禁止のテープから出るとさっさと路地裏に入る。

そろそろ能力でも解こうか、とした瞬間

「何やってんだよ。てめえ」

とある人物が立ちはだかった。

数分前

「インデックスー。——まったくどこに行ったんだ」

上条はいなくなったインデックスを探していた。インデックスがいなくなった後警備員が到着し、すぐに周囲が包囲され人が集まってきたため完全に行方がわからなくなった。御坂とも人ごみの中でつい先ほどはぐれてしまった。

はぁー、となんとなく上条がビルを見ているとインデックスを抱えた一人の少年が正面から出て来る。

「あ、あれはインデックス」

立ち入り禁止のテープを避け走ろうとした時、

「止まるじゃん。少年」

警備員の一人に呼び止められた。

「月詠先生とこの悪ガキじゃん」

「？」

上条当麻に警備員の知り合いはいない。誰だ？と首を傾げると、警備員がヘルメットを取る。上条はその人物に見覚えがあった。

「黄泉川先生！」

「じゃん」

黄泉川愛穂

不思議学園体育教師

普段から緑色のジャージを着用し、もったいない女性として普通科の校内で知られている。同時に警備員もやっており、強能力者（レベル3）だろうが素手で倒す程の実力を持つ。

「黄泉川先生。あそこにいる白いシスターさん。俺の友達なんだよ」

「？ そんなのどこにいるじゃんよ？」

「えっ？」

まさか見えていない？

周囲を見ると黄泉川以外の警備員もインデックスを抱えた少年の姿を見ていなかった。

いや、見えていなかった。

「少年。どうしたじゃん？」

「先生。ちょっと退いてくれ」

上条は状況がよくわからなかったが、姿を消すことのできる何者かがインデックスを抱えている。どう考えても普通じゃない。

「ダメだ。この先は立ち入り禁止じゃん」上条は黄泉川の言葉を無視し走りだした。少年を追うと、うす暗い路地裏で立ち止まる。そこで上条は言う。

「何やってんだよ。てめえ」

少年が振り返る。

「誰だ？お前」

上条は振り返った少年を見て驚いた。自分と同じ高校生くらいだろう。インデックスの知り合い———のようには見えない。むしろインデックスをさらおうとしているようだ。

「インデックスをどうするつもりだ？」

「お前に話す必要があるかよ」

今まで上条は不幸に不幸が重なり何度もケンカをしてきた。

何度もやってきた上条だからこそわかる。こいつは違う。道端でケンカしているようなその辺の不良とは違う。

何か締め付けられるような威圧感を上条は感じた。

「———ったく。それにしても、俺の能力が見破られるなんてな。

お前、俺と同じような能力でも持ってんのか？」

少年はインデックスを下ろすとポケットから銃を取り出し、

「まあ、これから死ぬから別にいいが」

上条に構える。

身構える上条。

「へえ。銃突きつけられて逃げ出さない辺り肝は据わってるみたいだな」

その時、銃相手に上条が取る行動はほとんどなかった。逃げ出すという選択肢もあったが、それだと確実に背後から弾を喰らってしまう。だとしたら上条が取るべき行動は一つ。

「だが、それは勇気じゃない。無謀と言うんだ」

一瞬の判断が上条の命を奪う。

上条は少年に向かって走り出す。

「うおー!!」

「くっ!」

バン、路地裏の一角で銃声が響く。少年の打ったその弾丸は上条の頭の右に逸れる。上条は少年の懷に潜り込む為走る。

だが、すでに少年は銃の引き金をひこうとしていた。

銃を構え三発の弾丸を放つ。弾丸の一つは上条の左肩に当たり、後の二発は上条を逸れ地面に当たる。

その隙に思いっきり上条は少年の顔を殴り飛ばした。少年は一メートルほど吹っ飛び、被っていた帽子がとれ、地面に落ちる。息を荒らし、上条は安堵の息を漏らす。上条はインデックスを抱き上げ

「大丈夫か? インデックス」呼びかけると、インデックスは口をもごもごさせながら言う。

「おなかすいた」

「またかよ」

インデックスの寝言に一安心して肩の力を抜く上条。

「あつ、そうだ。さっきのあいつは」

吹っ飛んだ少年に近づく。

「なっ!」

さっきまで命を取られそうだった相手。

インデックスをさらおうとした相手。

銃を向けられた相手。

その相手が

「おんなの子？」

上条の見間違いではない。

さっきまで少年だと思っていたのは少女だった。短髪よりも少し髪が伸びていて、さっきまで帽子で隠していたようだ。顔も月明かりでだんだんよく見えるようになってきた。よく見ると、かなり可愛らしい顔をしている。

こんな女の子がどうして？

考えた上条に複数の足跡が聞こえた。

「少年。銃声が聞こえたけど大丈夫じゃん？」

黄泉川愛穂とその他の警備員四人が路地裏に現れる。黄泉川は上条がただならぬ形相で路地裏に走り去ったのを見た後、銃声を聞いて急いで駆けつけたのだ。

「はい。大丈夫です」

「そう。ならよか………って少年。左肩から血が出てるじゃんよ！」

今になって上条は左肩が撃たれているのに気づいた。言われた通り左肩からはかなりの量の血がでており制服は左肩から左足にかけてべっとりだった。

「それよりもあの白いシスターさんを保護してください。何か変な奴らに追われているみたいで」

「何言ってる。他人よりも自分の心配するじゃん」

「大丈夫ですよ。何だかそんな痛みが感じられないって言うか、とにかく痛くないんですよ」

「そんなの神経が麻痺してるとかで体の痛みがわからないだけじゃない。ほら、血がまだ痛々しく流れてる」

「言われてみれば、何か頭がぼーとして………ふこう、だ」

「しょうねーん！！」

上条はその後警備員により病院へ運ばれたのだった。

動き出した組織（後書き）

どうでしたか？

自分正直超能力とか魔術の解説下手なんでご指摘してくれるとうれしいです

それぞれの一日（前書き）

たぶんサブタイトルと内容が会っていない可能性がありますので、ご容赦を

今回はオリキャラを出すのですが、ちょいしかでません

なんか色々混同しているかもしれません

超電磁砲キャラも出ます

それぞれの一日

不思議学園

不思議学園は学園都市が作り上げた世界最高の学園だ。その入学条件は普通の学校と違う。入学に必要な筆記試験はもちろんだが、超能力のレベルを計るレベル試験がある。だが、あくまで不思議学園の試験は現在の総合的能力を計るだけ、一番重要なのは将来性だ。将来的に能力の上がるとされる者、能力の高い者を優先的に入れられる。そして学園都市は実験都市という顔をもつ。能力開発の研究の為にサンプルとして将来性のない生徒も多く入れられる。つまりは、入ろうと思えば誰でも入れるのだが、毎年多くの生徒が受験し、人数の関係から入れない者も多い。

四月八日

八時一〇分

「お姉さま」

「うーん」

「昨日の夜は一体どちらにいたんですの？」

能力の高い者である白井黒子は科学科の先輩の御坂美琴と肩を並べ歩いていた。

「電気街の方にちょっとね」

はて？、白井の記憶では美琴は電気街に行く用事などなかった筈だ。白井は頭の中を何度も検索しているが、美琴がとある少年の携帯電話を直す為にわざわざ電気街に行ったとは微塵も考えつかない。だから、いつものように、

「お姉さま。もしや人に言えないような過ちをしていたのでは？」

「なーに言ってるのよ。そんな過ちなんてあるわけないじゃない。」

第一アイツとはそんな関係じゃないし……………大体アイツは……………

ふざけてみたが、

（ま、またアイツですよ！！一体どこの誰ですよ！？）

最近美琴の口からでる『アイツ』という言葉。本人は無自覚で言っているようだが、白井としては個人的にかなり気になっている。しかも美琴の反応からして相手はおそらく男性だろう。白井は美琴からでる『アイツ』という人物をいつの頃から目の敵に近い感情を抱いていた。

（ですけど……………、）

隣で喋っている美琴を見ながら白井は小さな笑みをつくる。

（お姉さま。とても良い顔をしていますの。その『アイツ』という人はお姉さまにとつての支えになってらっしゃるのですね。……………正直うらやましいですよ）

美琴の顔を見ればわかる。

「……………って聞いているの？黒子？……………それはそうと黒子は昨日大変だったんじゃない？」

「……………何のことですよ？」

突然の美琴の言葉に白井は目を瞬かせる。

「だって、昨日電気街で爆発があったじゃない。電気街の辺りってアンタのとこの風紀委員の管轄じゃないの？」

美琴の言葉に絶句する白井。

白井は再び頭の中を検索したが何も思い当たらない。白井は風紀委員だ。風紀委員は学園都市の治安を守る生徒によって構成された組織だ。主に事件、事故等は風紀委員に必ず連絡が入るようになってる。筈だが、昨日美琴の言ったような事件が起きたという報告を白井は受けていない。（なぜ？もしかして情報規制がかけられていた？）

しかもそれはつい昨日の風紀委員会議で議題に上がっていた連続爆破事件に似ている。白井は空に視線を変え、浮かんでいる飛行船を

見つける。飛行船につけられた大画面には学園都市ニュースが流れていた。が、肝心のビル爆破という文字は一切見られない。

(報道もされていないなんて……)

「黒子？」

白井の行動に違和感を感じたのか、美琴は心配そうに声をかける。

「なっ、何ですの？お姉さま」

白井は一瞬動揺してしまった。その動揺を美琴に見られた。美琴は優しい。美琴の事をよく知る白井だからわかる。お姉さまに今この話をすればは必ず事件に顔を突っ込むだろう。例え、それがどんな危険な事でも構わずに。そういう人だ。美琴は白井にとって大事な存在。だから今美琴に何か勘ぐられては困るのだ。絶対に気づかれた、白井は思った。が、

「そう、ならいいわ」

意外な程に美琴は淡白な言葉を返した。多分白井の動揺を見て察したのだろう。気づいたけど、あえて。

白井はそんな美琴を横目で見ながら同時に科学科の門を潜った。

一時四十六分

科学科の校門前

「白井さん。遅いですよ。人を呼び出しておいて」

「すみませんの。こちらも色々あります」

今は放課後。白井は朝の美琴との会話の後に同じ風紀委員の初春に連絡をとっていた。

「それで何か分かりましたの？」

初春はバックの中から手の平でも持てるような学園都市製ノートパソコンを取り出す。電源を入れるとコンピューターの画面に文が表示される。

「白井さんの読み通り、昨夜の電気街でビルの爆破があったようです」

「やはりそうでしたか。……それで詳細は？」

「はい。昨夜、電気街の表参道に建つビル『ホビー繭高』で謎の爆破が起こりました。三階建てでおもちゃやゲーム等の商品を扱う専門ショップです。爆破時刻は昨夜の七時三十八分。爆発されたのは三階。幸いケガ人はいなかったみたいです」

坦々と文を読み上げる初春。

「さすがは初春ですわね。すでにそこまで調べ上げているなんて」初春の特技はパソコン等の機器を使用した情報収集・処理能力だ。その能力は白井ですら舌を巻くほどの腕前なのだ。

「えっ、いや、と、当然ですよ。」

だが、白井は知らない。彼女がまさかハッキングをして手に入れた情報とは思えない。

「それですね……………うわっ！」

突然、初春の声をかき消すように大きな風が吹く。

（そういえば今日は風が強いとニュースでやっていましたわね）と白井が目を細め、手で風を防いでいると、

「うっいはるーん！」

「きゃー!!!」

一瞬、初春のスカートが風のせいかと思ったが、実際は誰かに後ろからめくられたようだ。スカートの中身は水玉のパンツ。正直白井は少し子供っぽい、と思ってしまった。

「やつほー。白井さん」

スカートをめくった人物はぴよこ、と初春の後ろから顔を出す。

「佐天さん」

佐天涙子

不思議学園普通科中等部一年生

初春の同級生。初春のスカートめくりが趣味というセクハラ中学生だ。

「佐天さん。なぜここに？」

「いやー。初春がすごい形相で教室から出て行くから気になっちゃ

って」

テヘッ、と軽く舌を出す佐天。

「それにしても。水玉かー。残念」

「な、何を残念がっているんですか！いい加減佐天さんは人のスカートをめくるのは止めて下さい！？」

「だってー、私の予想だと初春の今日のパンツはしまパンだと思っ
たんだもん」

「だ、だからですね。こんな人が多い場所でそういう発言は止めて
下さい！？」

初春が指摘した通り周りを見ると不思議学園生徒の男子が初春のパ
ンツを見て顔を赤らめていた。『いやー、良いもん見れたにゃー』
『今日わいらかなりついてんのとちゃう。もしかしたらこの後空か
ら女の子でも降ってくるんとちゃう？』と、サングラスに金髪と青
髪に耳にピアスをあけたバカっぽい二人の高等部の男子も言いなが
ら通り過ぎる。

「ところで佐天さん。あなた、もしかして私たちの話を……………」
……」

白井は切り上げるように佐天に問いかけると、

「はい！バッチリ聞いちゃいました！」にっこり笑顔で返された。
ガクリッ、と白井は頭を抱える。佐天は風紀委員ではない。只の一
般人だ。そして白井と初春の友人でもある。得体の知れない今回の
ような事件を出来れば白井としては聞いてほしくなかったのだが、
仕方ない、と頭の中でため息をつく。

「それで初春。何か言いかけたようですけど？」

「ああっ！？そうでした！？」

こほん、と初春は咳払いをする。次に初春の口から出た言葉は白井
にとって以外な言葉だった。

「その昨夜のビル爆破の事件なんですけど、すでに犯人が捕まった
みたいなんです」

「なんですって！！！どういことですの初春？」

白井は驚きを隠せない。今まで犯人の痕跡すら掴めなかったというのに、昨夜のうちにすでに捕まっていたなんて。

「はい。私も驚きました。が事実みたいです。七時五十二分に警備員が逮捕したようです。どうやら銃を所持していたようで負傷者が一名出ています」

「それでそれで犯人の名前は？やっぱり噂通り、スキルアウトによる無差別爆破テロなの？」

初春のノートパソコンを覗き込みながら話に入ってくる佐天。彼女は外見に似合わず結構ミ―ハーだったりする。

「いえ。犯人は能力者ですよ。名前は縦穰歐花。不思議学園科学科高等部の二年生です」

「科学科の生徒という事はその縦穰欧花には何か爆発を起こすような能力でも？」

「書庫だど、彼女の能力は『色迷彩』カラーカモフラージュ。人の五感の一つ、視覚に働きかけ自分や自分の振れている物を見えないようにする事ができるようです」

「と、いう事は爆破事態は彼女の能力は関係ないんですね」

「その所がまだよくわかっていないんですね。元々情報規制がかけられている事なので」

白井は事件の詳細を最初から自分なりに考える。

次第に大きくなる無差別爆破。

能力の使用された痕跡のない現場。

不思議学園生徒縦穰欧花。

ダメだ、まだ足りない。この事件を解決するには決定的に何かが必要不足していた。

ここは、

「やはり、会って直接話を聞くのが一番ですの」

「縦穰欧花にですか？」

確かに事件の解決には被疑者である本人に直接聞くのが一番。だが、情報規制、報道規制されていた事件の犯人に風紀委員である白井た

ちが面会を求めたところで、門前払いは確実。

ならば、と白井は

「そちらもですが。私は縦穰歐花を逮捕した際に負傷した方に話を聞きたいですの。初春その負傷した方の名は？」

「それでステイル。この縦穰歐花という方は彼女を狙う組織に関係があるのですか？」

『聖徒会（聖なる加護）』のメンバー神裂火織は手の書類の束を見ながら同じくメンバーのステイルに聞く。

「ああ、まず間違いないだろうね。ビルの爆破は禁書目録を強奪するためにやったようだ」

ステイルは得意気に言いながら、煙草に火をつける。

ここは学園都市にあるとある教会。高層ビル群の中に位置しまるでそこだけ切り取られたようにぽつん、と建っている。

すると、

「あー」
可愛らしい声が響き教会のドアを叩かれると、中学生くらいの少女が中に入ってくる。少女の格好を見るからに科学側の制服を着ていた。ここは教会だ。学園都市といえども立ち寄るような子がいるんだなど、ステイルには物珍しかった。ステイルはイスに腰掛け、神裂はその隣で難しそうな顔で立っている。二人の格好は教会に似つかわしくなく、その場所だけ異彩が放たれている。

「なんだい？（なんですか？）」

睨みつけるようにステイルと神裂は少女を見た。

「なんでもありません！！」

と、少女は目を涙目にして出て行く。二人はおよそ同時に首を傾げる。

ふー、とステイルは煙草を吸うと

「話は戻すよ。彼女をこれ以上危険な目にあわせない為にも、護衛を強化する必要がある。……………それで例の件はどうなったんだい神裂」

「はい。何とか不思議学園との交渉はうまくいきました。彼女もきつと喜ぶでしょう」

「あのー」

また、中学生くらいの少女が教会のドアを開き中に入ってくる。今度はおどおどと怯えながら話しかけてくる。

「なんだい？（なんですか？）」

二人は話を中断し、少女に目を向ける。

「ひっ！？す、すいません！！」

少女はまた出て行く。

なんだ？と二人はまた首を傾げる。

「ここからは機密事項だからしつかり聞いてくれ」

「はい」

ステイルと神裂は真剣な表情で話を再開しようとした時、もう一度ドアが開かれ、

「あのー」

「さっきから一体なんだ！？（さっきから一体なんなんですか！？）」

二人は少女に思いっきり叫んだ。

「ひいひいひいひいひい！！」

もう、うんざりと言わんばかりに声のした方に向くとまたさっきの少女が話しかけてきた。いきなり叫んだからか、目に涙を溜め、「うわあああああん」と泣き始めた。

（ス、ステイル。あなたが大きな声を上げるから泣いてしまったではありませんか！）

（ぼ、僕のせいだって言うのかい？勘弁してくれないか。僕はこういうのは苦手なんだ。神裂こそ大きな声だったじゃないか！）
事件の話が一変。いつのまにか小声で泣きじゃくっている少女をど

うするかの話し合いが始まった。

（なんで、僕が………）

話し合いの結果、ステイルが少女に話を聞くことになった。警戒されないようにゆっくり少女に近づき、

「いったいどうしたんだい？」

ステイルは自分の持てる全力を振り絞り満面の笑顔を浮かべる。少女は涙を拭いステイルを見ると

「うわああああああん!？」

さらに大きな声で泣いた。

バツ、とステイルは神裂の所へ戻る。

（僕には無理だ!）

神裂はため息をつく次は私が行きます、と顔で告げると少女に近づく。

「どうしましたか？良ければ私が話を聞きます」

いつもと同じように冷静で平坦な声で少女に聞く神裂。

少女は涙を流しながら泣きじゃくる声を殺しながら話す。

「わ、わたし……ひっぐ……で……どうしたらいいか

……ひっく……ここなら……いい

よって…教えてくれ……て。おとうさん……ひっく……

……たいへん……つか……ひっぐ……

…」

「なに言ってるかわかんねえんだよ!！」

神裂はたまらず声を荒げてしまった。少女は驚いたようだ。目の前の人物が同一人物とは思えないようで、これ以上泣くことはなかったが怯えた子犬のように泣きながら走り出すとステイルの後ろに隠れた。

「すいません」

申し訳なさそうに神裂は謝る。

「それで、君は一体誰だい？」

ステイルは少女に聞くと、若干怯えながらはつきりと口を開く。

「繭高茫洋と言います」

上条当麻

とある少年の名が大学病院の一室の表札に書かれていた。ゆっくりと上条当麻は目を覚ます。上条は痛む左肩を庇いながら上半身だけベッドから体を起こす。部屋を見渡すと上条がいるのは六人一部屋ではなく完全な個室だった。ヒュー、と吹く風に白いカーテンが揺れる。

「すー、……………すー、……………」すると上条は見た目小学生教師月詠小萌がベッドに体をよりかけながら可愛い寝息をたてていた。その姿に小さく笑みがこぼれる。思わず上条は小萌の頬をつんと指でつつく。つつかれたのが嫌だったのか頬をかく仕草を取ると小萌はゆっくりと目を開ける。

「うん……………ふぁー。よく寝たのです」

あくびをし大きく伸びをする小萌。

「ハロー。先生」

「かつ、上条ちゃん。起きたのですね。良かったのです」

「はい」

「はい、じゃありません。どれだけ心配したと思っていますか。昨日いきなり黄泉川先生から連絡があって上条ちゃんが病院へ運ばれたって聞いて、先生ずっと心配だったんですよ。何でも白い修道服を着たシスター少女を助けようとしたそうですね。上条ちゃんは本当に仕方のない生徒です」

「ちょっと待ってください。小萌先生。先生の脳内では俺は女の子と見たら、どんな事でも突っ込むお祭り野郎とお思いで？」「違うのですか？」

「素で首を傾げられた!？」

上条がうだー、と頭を抱えると病室のドアが開く。

「ダメじゃん。小萌先生。少年は一応良い事をしたんだから、その辺で勘弁するじゃん」

緑色のジャージに左手に紙袋を携えた黄泉川愛穂が入ってくる。昨日の警備員の格好だとよくわからなかったがジャージの上から見ると体のラインがよくわかる。確かに噂通り、と上条は納得した。

「でもですね——」

「あー、もうわかった。だからそんな泣きそうな顔でぶんぶんするのはよすじゃん」

黄泉川は持っていた紙袋を花瓶のある台に置く。

「少年。リングは食べられるじゃん」

「はい」ときくと黄泉川は上条にリングを軽く投げる。

「……………(混乱)」

「どうしたじゃん。早く食べるじゃん」

「えーと、この皮も剥かれておらずカットもされていないリングを食べるというのですか？」

「何か不満でもあるじゃん」

「大ありですよ! せめて包丁で小さく切ってください!」

その言葉に黄泉川は頭をかくと、

「私は料理スキルゼロだから包丁使えないじゃん」

面倒くさそうに言い放つ。もったいない女と言うのはどうやらこういうがさつな所からきているらしい。

「じゃあそのリングは先生が剥きます」

「ダメです。小さな子に刃物なんて渡せません」

「上条ちゃん。それはどういう意味ですかー!」

黄泉川はくっくつと笑いを堪えながら暴れる小萌を抑える。

「その様子ならもう大丈夫じゃん。昨日は色々大変だったからな」

黄泉川の言葉で上条は思い出す。

「そう言えば黄泉川先生。インデッ……白い修道服を着たシスター

はどうなりました？」

昨日会ったばかりの少女。インデックスはあの後どうなったのか上条は気が気でなかった。

「あの子だったら聖徒会に引き渡したじゃんよ」

「聖徒会？」

魔術師で構成された、学園都市で言う風紀委員みたいなものらしいがその実体はあまり知られておらず一般人の上条には容量を得なかった。

「大丈夫だ。魔術師って言ってもウチらと同じ人間じゃん。あの女の子はもう安全だ。安心しろ」

はぁー、と上条はため息を漏らす。

「良かった……た」

糸が途切れたようにつぶやくと上条当麻はベッドに倒れ込んだ。寝息をかき、寝顔をさらす上条。小萌と黄泉はそんな上条を見て笑みをこぼす。

「上条当麻………か。相変わらず月詠先生は生徒に恵まれてんじやん」

「なんですか？」

黄泉川の小さな声を小萌は聞き取れなかった。そのまま黄泉川は病室のドアに手をかける。

「帰るのですか？」

「ああ。もう用はなくなったじゃん」

病室から出て行った。

「いいんですか？」

「何がじゃん？綴理」

少年の病室の扉の前で立っていたのは、長い髪を縛り、眼鏡をかけた女性だ。

鉄装綴理

不思議学園の教師であり黄泉川と同じ警備員の女性だ。

「だって、昨日の事を詳しく事情聴取する為に来たんですよ。楽しく話をする為に来たんじゃありません」

「それは今まで腹をくだして病院のトイレにこもりっきりだった奴の台詞じゃないじゃんよ」

「し、仕方ないじゃないですか！？生理現象です！？」
顔を赤らめながら弁解する綴理

「生理現象ねえー」

「な、なんですか？」

「昨日あんだだけ飲んだり食ったりすれば仕方ないと思っただけじゃん。おまけに昨日の警備員の緊急呼び出しで一人だけ来なかったじゃん」

「う、そ、それは……………」

すると、ぐきゅるるゝ、と漫画やアニメでしか見たり聞いたりした事のないお腹の音になる。

「ひいー！ー！！」

鉄装は慌てて女子トイレに駆け込んだ。

「まったく世話が焼けるじゃん」

それぞれの一日（後書き）

どうだったでしょう？

自分は相変わらずダメ文だったように思います

さて、今回は佐天涙子や鉄装綴理

オリキャラ繭高茫洋を出しましたがどうでした？
たぶん意味わかんないでしょう
私も分かりませんから

名前の読み方は

縦穰歐花 じゅうじょう おうか

繭高茫洋 まゆたか ほうよう

と読みます

これから読んでくれると嬉しいです。

行間（前書き）

お久しぶりです
投稿するのが遅れてしまいましたが長い目で見てください

ではどうぞ

行間

とある部屋の入室

白い真っ白な空間。そこには同じような色の机と椅子が二つ。電気の明かりはついておらず室内は薄暗い。部屋の前に札でこう書かれている。

Interrogation room—取り調べ室—

部屋には椅子に腰掛け机に体をうつぶせに丸まっている一人の少女がいた。先の事件の犯人縦横歐花だ。彼女は先日事件の犯人として警備員に連行され、この部屋でずっと取り調べを受けていた。だが彼女は断固として何も話さなかった。

——あれから何時間経った？ 十五、十六………いやそれ以上かな

今は取り調べ室に縦横歐花一人だ。取り調べ室には時計はないためか時間を知る術がない。警備員の取り調べの際に聞いても言葉を濁すばかり、彼女が時間を知る方法は室内にただ一つある窓しかない。窓は鉄格子ががちりはめられ出られそうにない。外とは完全に切り離された空間。窓を恨めしそうに見ながら歐花はため息をつく。

——どうしたの？ 元気がないわね。

急に頭に響く少女の声。

歐花は立ち上がると周りを見る。部屋には自分一人、他に誰もいない。

——何をしているのよ？これは念話能力よ。
テレパス

念話能力 テレパス

簡単に言うのと離れた所にいる人と会話できる能力。歐花はこの能力を持つ人物を知っている。同じ組織の人間ではない。が、会ったことがある。学園都市にある裏に潜む組織の一つ『ワールド』の一人。

——何の用だ、って顔してるわね。私たちが何のために危険を犯してまであなたに接触してるか。わからない？

少女の声は欧花の頭で響き淡々と話し始める。

——アノ人に頼まれたのよ。なんかとってもお怒りでね事情を聞いたのよ。そしたらアナタがまさか警備員でも風紀委員でもない、それも一般人にやられるなんてね。お笑いもんよ。アハハハハハハ。しかも無能力者（レベル0）に！笑わないほうが無理ってもん——

ブツツ、と突然ノイズのようなものが聞こえると少女の声が頭に響かなくなる。

数分後再びノイズが走ると少女の疲れた声が響く。

——ハアハアハアハア、まったく破小牧のやつ、後でカップの刑を実行してやるうー！—— 大体ねえ。大事な作戦中に余所見してんじゃないわよ！えっ、もう繋がってる？………は、早く言いなさいよ！！

欧花は今の少女の発言で大体彼女たちが何人で行動しているか把握できた。真剣なんだかふざけてるんだか相変わらずわからない奴らだ、と彼女たちのやり取りに呆れる。

ごほっん、と少女は一息いれ、

つまりはアナタはもう用済みってことらしいわね。

冷たく言い放つ。その言葉は組織に見限らた事を意味する。歐花はすぐにはその言葉を受け入れられなかった。グルグルと歐花の頭に色々な事が駆け巡る。どこで間違えた？

どこから………私は。

『お姉ちゃん』

聞こえてくる。私を呼ぶ声。私はどうすればいいの？

でもそんなアナタにとっておきの大チャンス♪

少女の声と共に取り調べ室のドアが開く。

後は言わなくてもわかるわね。

行間（後書き）

どうでした？

今回は行間という事で短いですが学園都市の裏組織の一つをオリジナルで出しました。

次回は早めに投稿しようと思います

よろしく願います

白黒と赤炎（前書き）

今回も駄文で繰り広げられますが長いめで見てください

今回やっと魔術側と科学側を絡ませることができましたが多分かなり下手です

ではどうぞ

白黒と赤炎

「この病院ですね。上条当麻が運ばれたのは」

白井は初春と佐天と共に事件の被害者に会うためにとある病院へ来ていた。当然それは怪我をしたからではなく、事件の被害者である少年に話を聞くためだ。

この事件は何かある、白井はそう思えてならない。

「書庫バンクによるとケンカっ早いダメ学生となっています」

初春はパソコンを手に画面に映る資料を見ながら説明する。

「でもさー。そんな人に話を聞くななんて大丈夫かな？ いきなり殴りかかってきたりして」

「さ、佐天さん。滅多な事言うもんじゃないですよ」

だが佐天の発言はあながち間違っではない。実際に白井は以前解決した事件の時も、犯人と思われる人物に話を聞きにいき襲われた事がある。（その犯人はもちろんボコボコに返り討ちにしたが）。

「大丈夫ですわよ。もし襲いかかってきても私がいる限りあなたたちには指一本振れさせはしませんわ」

得意気に胸を張る白井。彼女は大能力の空間移動の使い手。その辺の無能力者の不良なら軽く捻られる所か何十人相手でも効果てきな策をろうじない限り彼女に勝つには難しいだろう。

「さっすがー。白井さん。頼りになるー」

「ほっほ。それほどでもありますわ」

病院の自動ドアが開き中に入る白井たち。入った直後の事だった。

「不幸だあああああああ！！」

大きな声が病院内に響く。

「何かあったんでしょうか！？」白井たちは声のした方に駆けつけると休憩室と書かれた部屋があった。部屋に入ると一人のツンツン

頭の少年がびしょ濡れで床に座っていた。

「だ、大丈夫ですか？」

よく見ると少年の前にはボタンを押すだけでお茶や冷水、お湯などが出る機械が置いてある。恐らく少年やその周りが濡れているのは機械の誤作動かなにかでお茶が吹き出したのだろう。煙まで出ている。

「うううう！な、なんで俺が触っただけで電子機器が煙を吹くん
だ？」

「アナタ一体何をしたんですの？事と次第によっては風紀委員としてアナタを拘束させてもらいますの」

「ち、違う！俺は只、お茶を貰おうとボタンを押しただけだ。そしてたらこいつがいきなり煙を吹き上げて、お茶が止まらなくなったんだ！！」

男の発言はかなり言い訳っぽく見苦しく見える。

「はぁ困りますわ。最近このような幼稚な事をする人が増えて。風紀委員も暇じゃないんですよ」

「違うって本当に……うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

少年の声が途中で絶叫に変わったのは立ち上がりとして床にこぼれたお茶に足をとられて転んだからだ。が、それだけでは終わらなかった。急に機がグウングウンと音を立てると勢いよくお茶が吹き出す。当然お茶は少年の顔に思いつきり降りかかる訳で。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

少年は熱さに耐えられずもがき始める。（そもそも耐えられはしないのだが）

その様子を見ていた若い看護婦は少年に近づきタオルを手渡そうとするが

「きゃっ!？」

と、お茶で看護婦も足を滑らせる。少年に覆い被さるように転んだ看護婦は絶句した。何故なら少年の手がちょうど看護婦の胸をガシツと掴んでいた。

「きゃあああああああ!!」

看護婦は余程驚いたのか少年の頬を思いつきビンタをくらわすと顔を真っ赤にしその場を小走りで立ち去った。

「うわー」

漫画やアニメでしか見たことない惨状に思わず声が漏れる佐天。横で見ていた二人も同じような事を思ったのか、初春は苦笑いを浮かべ、白井は呆れたような顔をしている。

『ほら、またアイツだぞ』

『本当だ。ったくうらやましいぜ。病院一番の美人看護婦の胸を揉めるなんて』

『さっきは美人女医の長谷川さんが着替えをしているロッカーに堂々と入ってたし』

少年はどうやら病院内で男性患者に敵意の目で見られているらしい。

「大丈夫ですか？」

可哀想になったのか初春は倒れている少年に声をかける。

「……………」

「ちよっ!？この方気絶してますわよ!!」

「今のビンタの一撃で？それとも倒れた時には既に……………」

「佐天さん何冷静に言ってるんですか!？早くお医者さんと呼ばないと!」

病院の個室。

上条当麻はベッドにいた。横にはカエル顔の医者が半ば呆れたように上条を見る。上条はつい先日肩に重傷を負いこの病院に搬送された。肩には弾丸が貫通した後があったが、今ではその後も殆ど塞がっている。

「君は病院をメイド喫茶か何かと勘違いしていないかい。同じ男として気持ちは分かるがね」

「顔をグルグルに包帯で巻かれている患者によく言えますね」

上条の顔や全身は包帯でグルグル巻きにされていた。この傷は病院内でできたものだ。

「いやむしろ関心しているんだよ。病院にいるのに次々と傷を増やして医者の手間を増やす患者に」

うっ、とカエル顔の医者に言われ上条は口を止める。確かに傷や怪我を直すのが病院であり医者の仕事だ。事あるごとに病院内で傷を増やす上条は心苦しくなりすこしかしこまる。もう静かにしていよう、と軽く心に誓う。

「君はもしかしてMなのかい？」

「そんな訳ないでしょ」

軽く受け流す上条。こんな馬鹿な質問に腹を立てないのは、上条が出来た人柄を持っているからだ。

「なんだ。つまらん」

カエル顔の医者は期待していた答えとは違ったようで少し肩を落とし落胆した。

「あのー。もうよろしでしょうか？」

上条は声のした方を向くとドアのあたりに三人の少女が立っていた。一人は髪を両側で縛り、御坂美琴と同じ灰色のプリーツスカートにベージュ色のブレザーを着ている。もう二人は同じようなセーラー服に一人は頭に造花のようなものをつけており、一人は長い髪にヘアピンを付けている。

「ああ。それじゃ僕はこれで失礼するよ」

と、カエル顔の医者は告げ病室から出て行く。

三人の少女を改めて見る。知り合い……ではないことは確かだ。知り合いならすぐわかる筈だし、そもそも知り合いで上条にお見舞いに来る人など担任の小萌ぐらいのものだ。その事実になんか上条は悲しくなる。

「で、君たちは一体？」

「風紀委員の白井黒子ですの」

「同じく初春飾利」

風紀委員？上条は首を傾げる。

「先日の事件についてお伺いしたいのですが？」

事件。上条の中で一つの事が思い出される。インデックスをさらおうとした少女が自分に銃を突きつけた時の事を。

「聞きたい事って？」

「事件の概要、昨日電気街に何があったのかを全てお聞かせ下さいます？」

縦穰歐花は学園都市のある一角にいた。そこには裏組織などがよく利用するとある喫茶店がある。看板にはピンク色のペンキこう書かれている。

『ゴ・とう・ヘヴン ミスリイナの天使の午後』。

どう見ても裏組織などが使いそうになさそうだが、そこが盲点になっていて気づかれにくいそうだ。が、別の意味で怪しい。店は周りの建物に合わないピンク色でとても目立っている。

歐花は呼吸を整え中に入る。

中もかなり派手でそこら中に明るいい色を多様している。

はあ、と歐花がため息を漏らしていると一人の男がカウンターの奥から出てくる。男は紫色のドレスのような衣装に身を包み、顔には化粧をしている。

「あら。縦穰ちゃんじゃない。お・ひ・さ・し・ぶ・り」

男は歐花にウィンクする。

そのウィンクに一瞬凍り付く歐花。一部の人がどうなのか知らないが、十代の歐花にはかなりキツイものがある。

「今日は何のようなの？常連の縦穰ちゃんならサービスするわよ」

「ありがとう。マスター」

「もう。何度言ったらわかるの？私の事はリ・イ・ナって呼んで
って言ってるでしょう」

歐花は何度もこの店に訪れているが正直馴れない。リイナと名乗る
この男は普段からお姉言葉を使いふざけ半分に喋りかけてくるの
だ。

「マスター。そんなことよ……」

「あー、何も聞こえないなあ」

歐花の言葉を遮るように言うリイナ。

「私はリイナ。お花畑に咲く一輪の薔薇」

何が何でもリイナと呼ばせたいらしい。一人で何かしゃべり始めた。
「リイナの心はガラスのように壊れやすく、水のように透き通り
、鉄のような固い」

「もうわかったわよ！？……リイナ」

「聞こえないなあ」

耳を傾けるリイナ。

「リイナ！！」

「はい。よく出来ました。やればできるじゃないさすが縦穰ちゃん
完全に遊ばれた上馬鹿にされた。歐花は静かに怒りを抑える。

「で、リイナ。アレは用意してあるかしら？」

「ああ。さっき電話で言ってた奴ね。用意しといたわよ」

リイナはカウンターの奥から一つのダンボールを持ってくる。欧花
はそのダンボールを開けると、ドラマなどで見られる爆弾が現れる。
一つ一つ欧花は確認する。

「10個程度だけだね」

「十分よ。ありがとう」

「……………」

静かに欧花を見つめるリイナ。

「何？」

「あまり他人の事を詮索しない主義だけど、一応言わせてもらおうわ」
「？」

「アンタ。もうこれ以上あの組織に関わるのは止めなさい」
「!？」

「私もこういう稼業やってるから、言えたもんじゃないけど、正直アンタにはあの組織でやってくなんて無理よ。今ならまだ引き返せるわ」

リイナの言葉が深く突き刺さる歐花。口を閉ざし、暗い表情を浮かべる。

だが歐花はすぐに言う

「いい。覚悟はできてるから。やつらを完全に排除しない限り私は止まらない」

それはまるで自分に言い聞かせるように。
目に迷いはないようだった。

「なる程。そのような事が……………」

「ああ、俺の知ってるのはここまでだ」

上条当麻の話を聞き白井黒子は考えるような仕草をとる。どうやら上条の話を聞き事件の整理をしているようだ。そんな姿を見ていると少女が上条の手を握る。

「上条さんてすごいんですね」

白井の横で静かに聞いていた少女が急に口を開ける。

「えっ？」

「だって、縦横欧花は拳銃を持っていたんですね。それに立ち向かってしかも倒しちゃうなんてすごいです!？」

面食らったように驚く上条だが、少女は尊敬の眼差しを注いでいる。

「私佐天涙子って言います」

どうやら本当にすごいと思ったのだろう。かなり興奮しているようで少しばかり鼻息が荒い。白井はそんな佐天を冷ややかな目で見ながら上条に目を向け、思い出した様に言う。

「あれ、そう言えば初春はどこへ行っただんですの？」

「初春ならさっき話を聞いてる途中にお手洗いに行きましたよ」

佐天の言葉を聞くとしようがないですの、と白井は呟く。

「あのー。白井だっけ、風紀委員の？」

上条は白井に声をかける。

「何ですの？」

「インデックスがどうなったか知らないか？」

上条が一番気になっていたのはインデックスの事だ。あの後聖徒会に引き取られたと黄泉川は言ったが、その後すぐ寝てしまった為詳しい話を聞けなかったのだ。

「すみません。私たちはそこまで詳しい知らせを受けていませんのでそれに情報をあまり一般人に公開できないので」

「そうか」

上条はがつくりと肩を落とす。

「君かい？上条当麻って言うのは？」

三人は振り向くとら二メートル近い長身の白人の男が病室に入ってきた。歳は十四、十五くらい。服装は教会の神父が着ているような、漆黒の修道服。ただし『神父』と呼ぶには男は異様だった。

甘ったるい香水の匂いを振り撒き、染めたような赤い髪に、左右10本の指には銀の指輪、耳にはピアス、右目のまぶたの下にはバーコードの形をした刺青が刻まれていた。

「お前誰だ？」

「聖徒会執行部『聖なる加護』の一人ステイル・マグヌスだ。君に話を聞きにきた」上条は初めて見る。聖徒会の人間を。どこか世界

の違うようなそんな漠然とした物を上条は感じた。

「あなたですか？ 聖徒会の方と言うのは？」

ステイルは上から眺めるように白井を見ると腕にある風紀委員の腕章を見つけると嫌そうな顔を作る。

「なんでここに風紀委員がいるんだい？」

「あら、いたら何か都合の悪い事でもありますの？」

白井はステイルに突っかかるように言う。

「いや君みたいなのが何人いても僕にはまったく関係ないから。そこをどいてもらおうかおチビさん」

「聖徒会^{そつち}になくても風紀委員には大ありますの。デカ物」

「君は僕にケンカを売っているのかい？ だとしたら止めといった方が身のためだ。君はすぐこの病院に入院することになるよ」

「ご心配なく。場をわきまえず臭い香水を振り撒いて病院内を闊歩するでくの坊にやれるほど私は甘くありませんわ」

バチバチ、と火花を散らす白井とステイル。

「あ、あの二人共少し落ち着いてください」

二人の間に割って入る佐天。だが、お互いが気に入らないのか二人はにらみ合いを止めない。

「おい、ステイルって言ったけ？ お前俺に話を聞きに来たんじゃないのか？」

上条は本題に移そうとステイルに話を振る。

「ああ、そうだった。君に聞きたいのは………」

「その必要はありませんの」

白井がステイルの言葉を遮る。

「このデカ物には私が伝えます。多分聞きだいたい事は私達と同じでしょうし。聞きたいこともございますし」 白井の目に何かを感じとったのかステイルはフン、と鼻で笑うと

「いいだろう。ここではなんだ、外で話すでしょう」

言い背を向けると病室のドアまで歩き手を掛ける。

「ちよっと待て!？」

病室を出ようとするステイルを呼び止める上条。

「なんだい？」

「インデックスはどうなったんだ？」

その問いに不満そうな表情を浮かべると背を向きながらステイルは、
「彼女は君の事を話していたよ。楽しそうにね。君にまた会いたが
つてる………とりあえずそれだけは伝えておくよ」

と言い、病室から出て行った。

「では、私達もこれで失礼しますの」

「上条さん。さよなら」

と、白井と佐天も続けて病室から出て行った。

白黒と赤炎（後書き）

どうでした？

誤字脱字や悪い点がございましたら気軽に言ってください
すぐに修正します

かなりゆっくり目のスピードでいってるので自分でも終わるのかと
ちよっと不安ですが何卒よろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1063k/>

とある不思議の学園生活

2010年10月11日05時46分発行